

昭和 41 年 度

全国学力調査の結果に関する分析的研究（国語）

— 文章の読解について —

目 次

I 研究計画の概要	1
〔分析的問題〕	7
(1) 小学校第5学年	7
(2) 中学校第1学年	14
(3) 中学校第3学年	18
II 文章読解の基礎的問題	24
1 語句の意味用法の理解	24
(1) 小五 一	24
(2) 小五 二	26
(3) 中一 1	29
(4) 中一 2	30
(5) 中一 3	30
(6) 中一 5	30
(7) 中三 1	32
(8) 中三 2	33
(9) 中三 4	34
2 文・段落の理解	35
(1) 小五 三	35
(2) 小五 七	38
(3) 中一 1	40
(4) 中三 1	42
II (付) 読解力の伸び	44
中一 3	44
応答一覧表	45

I 研究計画の概要

この研究の目的・内容・方法の概略については、既に序説において述べてある。この国語科では読解を取り上げているが、読解をどのように考え、どのような角度から見ようとするのか、その範囲や研究の中心課題について、いささか述べておきたいと思う。

まず、今年度全国学力調査国語科の調査結果がどのようなものであったか、文部省の中間報告書に基づき、各調査問題のねらいや、正答率、さらに本県で発表した本県の正答率を概観しておきたい。

(1) 小学校第5学年

大 問			小 問		正 答 率	
番号	分類・領域等	ね ら い	番号	ね ら い	全 国	本 県
一	読むこと 説明的文 章の読み 取り	○文脈の中における語句の意味、用法の理解 ○文章の要点や要旨を読み取る能力 ○文と文、段落と段落の関係の理解	①	文脈の中における文と文との関係の理解	61.3	57.7
			②	文脈の中における語句の意味、用法の理解	38.4	39.4
			③	段落の要点を読み取る力	29.3	28.3
			④	文章の中での段落のはたらきを理解する力	41.0	38.1
			⑤	文章の要点の理解	45.9	44.7
			⑥	文章の要旨の理解	27.2	26.7
			⑦	段落と段落との関係を読み取る力	41.7	39.2
二	読むこと 文学作品 の読み取 り	○文脈の中における語句の意味、用法の理解 ○人物の心情を理解し鑑賞する能力 ○情景を理解し鑑賞する能力	⑧	文脈の中における語句の意味の理解	47.7	51.3
			⑨	文章に書かれている心情を読み味わう力	72.0	71.2
			⑩	文章に書かれている心情や情景を読み味わう力	57.0	56.6
			⑪	文章に書かれている人物の態度や情景を読み味わう力	83.9	83.5
			⑫	文章に書かれている心情を読み味わう力	71.8	70.4
			⑬	〃	58.0	58.9
		○文章を組み立てる能力	⑭	適切な素材で文章を構成する力	44.0	42.2
			⑮	心情を的確に書き表わす力	81.0	81.3
			⑯	文脈の中における語句の用法	70.8	68.8

大 問			小 問		正 答 率	
番 号	分野・領域等	ね ら い	番号	ね ら い	全 国	本 県
三	書くこと 作文	○心情を適切に表現する能力 ○素材を選択して書く能力 ○ことばに関する事項の理解	⑰	段落の構成を考えて書き表わす力	4 4.7	4 3.5
			⑱	心情を効果的に書き表わす力	7 1.8	6 9.7
			⑲	表記(「 」)の用法	7 6.8	7 5.6
			⑳	ことばのきまり(文末表現)の理解	2 2.8	1 9.1
四	読むこと, 書くこと 語句と漢字	○当用漢字別表の漢字の読みと語句の理解 ○当用漢字別表の漢字の書き取りと語句の理解	㉑	当用漢字別表の漢字を読む力	8 8.7	8 5.9
			㉒	〃	8 1.6	7 5.7
			㉓	〃	8 0.5	7 8.6
			㉔	〃	8 7.8	8 5.3
			㉕	〃	8 6.5	8 3.9
			㉖	当用漢字別表の漢字を書く力	8 3.9	8 0.3
			㉗	〃	6 4.0	5 9.7
			㉘	〃	6 0.5	4 7.8
			㉙	〃	4 6.0	3 4.9
			㉚	〃	7 0.4	6 4.7

(2) 中学校第1学年

大 問			小 問		正 答 率	
番号	分野・領域等	ね ら い	番号	ね ら い	全 国	本 県
1	読むこと 説明、文章の読み取り	○文脈の中における語句の意味や用法を理解する能力 ○段落の要点や文章の構成を読み取る能力 ○ことばのきまりの理解	①	文脈の中における語句の意味や用法の理解	4 8.0	4 7.1
			②	段落の要点を読み取る力	6 8.4	6 5.0
			③	段落と段落との関係を読み取る力	4 4.0	4 2.9
			④	ことばのきまりの理解(助詞)	6 7.0	6 6.2
			⑤	指示する語句の内容を読み取る力	7 4.9	7 3.6
2	読むこと 文学作品の理解と鑑賞	○文脈の中における語句の意味や用法を理解する能力 ○情景や心情を理解する能力 ○情景や心情を鑑賞する能力	⑥	文章に書かれている心情を読み味わう力	7 3.8	7 4.3
			⑦	〃	8 1.8	8 3.1
			⑧	文脈中の語句の理解と情景を読み味わう力	7 7.6	7 8.8
			⑨	文章に書かれている情景や心情を読み味わう力	8 6.7	8 7.8

大 問			小 問		正 答 率	
番号	分野・領域等	ね ら い	番号	ね ら い	全 国	本 県
			⑩	文脈の中における語句の意味や用法の理解	59.0	59.2
3	書くこと 作文	<ul style="list-style-type: none"> ○ 文脈の中の語句を適切に使用する能力 ○ 文と文との関係を明確に表現する能力 ○ 文章を構成する能力 	⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮	段落を適確に書き表わす力 文脈の中の語句を適切に使用する力 段落と段落との関係をつなぐ語句を使用する力 段落を組み立てる力 文章を組み立てる力	59.0 68.6 72.0 45.9 54.5	57.3 72.0 70.3 45.7 52.5
4	読むこと、 書くこと 語句と漢字	<ul style="list-style-type: none"> ○ 当用漢字別表の漢字の読みと語句の理解 ○ 当用漢字別表の漢字の書き取りと語句の理解 	⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕	当用漢字別表の漢字を読む力 “ “ “ “ 当用漢字別表の漢字を書く力 “ “ “ “	51.6 35.2 65.9 73.1 62.2 80.8 85.5 29.3 60.9 77.3	43.7 28.6 58.9 70.7 60.4 75.4 83.9 24.0 55.1 71.3
5	聞くこと、 話すこと 会話、説明、伝達の聞き取り	<ul style="list-style-type: none"> ○ 会話、説明の要旨を聞き取る能力 ○ 会話、説明、伝達の要点を聞き取る能力 	㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚	会話の要旨を聞き取る力 会話の要点を聞き取る力 “ 説明の要旨や要点を聞き取る力 伝達の要点を聞き取る力	93.4 93.5 78.4 71.9 50.7	93.1 93.1 74.6 70.5 52.9

(3) 中学校第3学年

大 問			小 問		正 答 率	
番号	分野・領域等	ね ら い	番号	ね ら い	全 国	本 県
1	読むこと 文章の読解	<ul style="list-style-type: none"> ○ 論旨の理解 ○ ことばのきまりの理解 ○ 要点や要旨を読み取る能力 ○ 語句の意味や用法の理解 	① ② ③ ④	論旨のすすめ方の理解 ことばのきまりの理解(接続する語句) 文章の要点を読み取る力 文脈の中における語句の意味や用法の理解	44.2 30.9 34.8 55.9	41.4 26.1 31.1 53.7

大 問			小 問			正 答 率	
番号	分野・領域等	ね ら い	番号	ね ら い	全 国	本 県	
2	読むこと 文章の読 解・鑑賞	○ 話題の理解 ○ 情景や心情を読み味 わう能力	⑤	文章の中の会話の部分における 話題の理解	64.3	62.8	
			⑥	文章の中に書かれている心情を 読み味わう力	57.2	55.3	
			⑦	文章の中に書かれている情景を 読み味わう力	50.3	48.5	
		⑧	文脈の中における語句の意味や 用法の理解	72.9	73.2		
		○ 語句の意味や用法の 理解(古典に関する 文章)	⑨	//	74.4	74.9	
3	読むこと, 書くこと 文章の組 み立てと 書き表わ し方	○ 文や文章を組み立て る能力 ○ ことばのきまりの理 解	⑩	文章を組み立てる力	45.6	41.9	
			⑪	ことばのきまりの理解(句とう 点)	58.1	57.6	
		○ 文章の書き表わし方 の理解 ○ 文を書き表わす能力	⑫	文章の書き表わし方の理解	40.0	39.2	
			⑬	文を書き表わす力	35.2	33.8	
4	読むこと, 書くこと 語句と漢 字	○ 語句の意味や用法の 理解	⑭	文脈の中における語句の意味や 用法の理解	15.9	13.0	
			⑮	//	70.6	70.6	
		○ 当用漢字の読みと語 句の理解 ○ 当用漢字別表の漢字 の書き取りと語句の 理解	⑯	当用漢字を読む力	55.0	50.1	
			⑰	//	58.9	45.4	
			⑱	//	82.7	78.9	
			⑲	//	18.6	20.5	
			⑳	//	9.1	6.5	
			㉑	//	43.2	32.0	
			㉒	//	80.9	75.7	
			㉓	//	44.4	35.2	
			㉔	//	40.0	29.4	
			㉕	//	33.8	27.5	
			㉖	当用漢字別表の漢字を書く力	28.5	28.8	
			㉗	//	14.7	10.2	
			㉘	//	15.4	12.8	
㉙	//	16.3	11.3				
㉚	//	38.9	31.5				
㉛	//	52.6	46.4				

大 問			小 問			正 答 率	
番号	分野・領域等	ね ら い	番号	ね ら い	全 国	本 県	
			㉔	当用漢字別表の漢字を書く力	38.8	29.7	
			㉓	〃	36.3	29.9	
			㉒	〃	27.5	20.9	
			㉑	〃	44.0	37.7	

以上は、全国学力調査国語科の全貌を理解する上での大きな手がかりになる。本研究においても、ここに示された正答率は、重要な資料である。ただわれわれがここに取扱おうとしているのは、読解領域であって、それがどの範囲を意味するかについて、少しく説明を加えておきたい。

読解というのは文章を読み解くことであるから、当然のことながら、漢字のよみかき、聞き取りの問題は考察の外におく。㉑の書くこと、作文の出題は、作文を問題本文としたもので、設問内容は読解の立場から取り上げてよいものが多く、一応検討の対象に加えておく。そこで一応、読むこと ㉑ ㉒を中心に、㉓を加えたものが研究の対象になるが、これらの中でも、その文章の具体性を離れた、単なる語法上の問題は、読解以外の問題として検討の対象から省く。例えば、中一の㉒の問題（「の」の使用法）は、純粋な語法上の問題として、省かれる。しかし、中三の㉑の問題は、同じくそのねらいが「ことばのきまり」ではあるが、その本文の具体性の上に立って考えなければ解決できない問題であり、読解領域の問題と考えてよい。こうした点で、それが読解領域に入れるべきかどうかという点で興味深いのは、小五の㉑（ことばのきまり(文末表現)の理解)の問題である。これは正答率のはなはだ低い問題であり、次のような問題である。その本文の一部と設問をかかげる。

本文

① このあいだ、にいさんとちと、^{おやま}大山にのぼった。ケーブルカーをおりてすこし行った所で、きれいなあげはちょうをみつけました。にいさんがとってくれたので、ビニールのふくろに入れて持ってあるいた。すこしたってみたら、ちょうは、どうしたのか動こうとしなかった。気になったので、大きな葉っぱを一枚とって、ふくろの中に入れておいた。そのうち、ちょうのことはわすれてしまった。

問題七

①には、それぞれの文の終わりの書きあらわし方でほかとくらべてそろっていないものが、一つあります。そろうように書きなおすとしたら、書きなおした文の終わりのことばは、どうなりますか。さいごの四字をひらがなで書きなさい。

この出題について、文部省の中間報告は次のように述べている。

小問㉑は常体と敬体の相違の理解が、文末表現にどのように書き表わせるかを調査しようとしたものである。設問の形式が選択肢法ではなく、文末表現を各自で表記する自由記入の方法をとった。全国学力調査の調査形式としては、漢字の書き取りを除いては初めてのものである。したがって問題の設問形式による正答率の低下は当然ある程度予想されていた。しかし問題内容と程度は前回の昭和

る9年度全国学力調査にもほぼ似たものがあり、その際は正答率77.6%を示したのである。したがって、その数字との比較が今回の自由記入問題の抵抗度のある程度を示すものだと考えられてよいであろう。ところが正答率は予想をはるかに下回って22.8%であり、今回の全設問のうち最も悪い結果となっている。このことは表現能力の指導についてこんど考えなければならない多くのことを含んでいると思われる。また表現活動におけることばのきまりの指導が重要であることを示すものであろう。このような結果に徴してこんどの作文指導のうえで考えてみなければならない問題を示すものと考えてよい。

以上の説明でこの問題の性質は理解できる。この作文の問題は読解とは表裏一体の問題である。問題の解決はその文章の読解にかかってくる。なるほど自由記述であるということがひとつの抵抗にはなっているであろうけれど、この正答率の低さはそれだけでは説明できないであろう。常体の中に敬体を混入することは子どもの作文にはよく見られることであり、この場合もそうした子どもの文章表現における未熟さからそれに気付かずにしたのだとも言えよう。実際の答案では、この問題に対しては無答のものが多かった。しかし、いま本文に立ちかえって、この部分を「みつけた。」とのおして読んでみると、それは単なる説明になり、極めて平板な、つまらない文章になる。「みつけました。」と言った方が、そのあげはちょうを見つけた時の驚きや喜びが生き生きと表現されてくるのである。すなわち、この場合、文章全体からは異調な、「みつけました。」という敬体表現が、さして耳障りにならないばかりか、いや少し耳障りになるからこそ、かえってその時の子どもの気持ちが生き生きと表現されてくるのである。ほんとうの文章は、こうした作者の息づかいを伝えるものでなければならない。むしろ原文のままにしておいた方が秀れた表現だと言えよう。この問題の出題者も、もちろんそうしたことを配慮した上での出題であろう。「それぞれの文の終わりの書きあらわし方ではかたくらべてそろっていないものが、一つあります。そろるように書きなおすとしたら、」とことわってある。したがって、この問題は、この文章の具体性を離れて、全く形式的な修辞上の問題として出題されていると見做されるのである。そう見做さなければならないと思われる。したがって、これは形式的修辞、語法上の問題であって、生きた文章の読解とはかかわりない問題だということになる。(したがってまた、読解の立場から言えば、この問題で正答できなかった者が、必ずしもこの文章理解が拙かったとは断定できないわけである。)

以上の説明から、ここで取り上げる読解の範囲がはる明らかになってきたものと思う。即ち、ここにいう読解はどこまでもそこに提示された問題本文を読み解く意味である。そして、そういう点から調査問題を見てゆくと、文章の全体と細部の関係を有機的に理解する力、もしくは文章を構造的に読み取る力が不足しているように思われる。それらは語句の意味理解や段落の意味機能の理解の問題として、そこに現れている。もちろんそれぞれの問題には、問題として難易の差があり、中には問題としてやや妥当性を欠いてはいまいかと思われるものもあるので、(例えば小五の⑥の問題のごとき)一概には言うことができないが、概して言えば、正答率の低い問題に、語解指導上考えてみなければならない問題が多く含まれているように思われる。

そこでこの研究では、読解領域で正答率も低く、指導上問題とすべき点を含む問題を重点的に取り上げた。そうした問題にどのような応答をしているか、各選択肢に対する応答を見てみた。これは小学校

5年、中学校1年、3年、それぞれ2校2学級ずつ、つまり各学年4学級ずつについてみたものである。これは全国学力調査施行後まもなく、7月に行なったものである。そしてさらにこの応答調査の結果、そこに見られる子どもの問題解決のつまづきや、その考えかた、捉えかた等、その実態をより詳しくし、その原因を究明するために、いろいろな角度から問題を作って調査した。これが9月実施した分析的問題である。この場合、原調査問題をそのまま、これに含めて実施したものもある。とにかく、この研究では、第一の資料は前述の各問題の正答率であり、第二の資料は応答調査であり、第三の資料は分析的問題である。この三つの資料に基づいて全国学力調査問題国語科の問題について、いささか分析を試みようとするものである。

ただ、この紀要では叙述の都合上、読解領域について、その中一二の問題にしぼって述べるので、そこに取り上げる問題も、その調査問題全てにわたるものでなく、部分的であり、断片的である。したがってⅡ章以下にかかげる分析的問題もその引用がこま切れになって全体の問題構造の中での位置づけが不明では、却って語者の理解を妨げる恐れがあるので、その都度説明する煩を厭い、ここに分析的問題の全部を載せておく。

〔分析的問題〕

(1) 小学校第5学年

小五

(I の 1)

本文〔一〕

- 鳥の中には、ツバメのように春や夏のころは見られるが、秋や冬にかけては見られないものがある。また、はんたいに、ガンのように、秋から冬にかけて日本にわたってくる鳥もある。
- ① ツバメやガンのように、遠くのほうからやってきて、また、遠くのほうへ帰っていく鳥ばかりではなく、たとえば、モズのように、秋になると平野へおりてきて、春や夏は山にすんでいる鳥もある。このように、季節のうつり変わりによって、鳥たちがすむ場所を変えることを、鳥の「^{わた}渡り」という。
- ② 鳥が「渡り」をする時刻はいつごろであろうか。たとえば、大形のカモ、ガン、コウノトリ、ハクチョウなどのようなもの、また、力の強いタカなどは、昼間でも「渡り」をおこなう。
- ③ 、小鳥の類は、たいてい夜間にむれをつくってわたる。
- ④ わたしたちが朝早く野外に出てみると、前日の夕方まではぜんぜん見なかった小鳥のむれを見ることがある。これは、前のぼんのうちによそからやってきた鳥たちである。
- ④ では、⁽¹⁾小鳥たちは、なぜ、そのように夜わたっていくのであろうか。また、鳥の目は夜になると見えな⁽¹⁾いといわれているが、もし見えな⁽¹⁾いとすれば、かれらは、夜空にめくらの旅をしているのであろうか。
- ⑤ ふだんは、林や森の間にかくれて生活している小鳥たちは、夜のやみにかくれて安全に「渡り」をしようとするのである。一つには、夜のやみがかれらをおそろしい敵から守ってくれるからである。たとえば、小鳥たちをおそろしくタカなどは、夜はねむっている。つぎに、⁽²⁾もった

いせつなことは、かれらは昼間はえさを求めなければならないということである。

わたしたちが少し気をつけて見ればわかることであるが、飼っているカナリヤとか、シジュウカラとかいうような、からだの小さい鳥は、かごの中で、たえずえさを食べている。ほとんど食べどおしのように、食べている。小鳥たちは、たえず食べていなくては、かれらの命をつなぐことができないのである。もし、こんな小鳥たちが長い旅行をするのに、昼間飛びつづけていては、かれらの胃はたちまちからになって、もう旅行をつづける元気がなくなってしまうにちがいない。そして、夜になってしまえば、かれらはえさをさがすことはできない。

そこで、夜は外敵の目にふれずに飛びつづけ、昼間は太陽の光にめぐまれてやすみ、えさを求めて安全なところにとどまるのであろう。

いっばんに、鳥の目は夜は見えないと思われている。人間にも夜になるとほとんど見えなくなる目の病気があって、これを鳥目とりめとっているくらいである。ところが、鳥たちの目は、夜になるとぜんぜん見えなくなるかという、けっしてそうではない。昼間のようには見えないにしても、かれらは、少しの光線があればあるていど見えるのである。

(I の 2)

本文〔一〕を読んでつぎの問いに答えなさい。それぞれの問いについて、1, 2, 3, 4の中から、いちばんよいものを一つだけえらんで、その番号を○でかこみなさい。

一 この文章の中の の中に入れることばとしては、つぎのどれがよいですか。

- | | |
|--------|--------|
| 1 たとえば | 2 ところが |
| 3 あるいは | 4 つまり |

二 この文章の中に ⁽²⁾ もっとたいせつなことは、とありますが、何にくらべてたいせつなのですか。

- 1 小鳥たちをおそうタカなどが、夜ねむっていること
- 2 ふだんは、林や森の間にかくれて生活していること
- 3 夜のやみが、おそろしい敵てきから守ってくれること
- 4 夜空にめくらの旅をしようとする事

三 この文章の中の⑥の部分は、全体としてどんなことをのべているのですか。

- 1 小鳥は、なぜ昼間はえさを食べなければならないかということ
- 2 飼っている小鳥は、なぜ食べどおしにえさを食べるかということ
- 3 長い旅行をすると、胃はたちまちからになってしまうということ
- 4 気をつけてみれば、鳥のえさを食べるようすがわかるということ

四 この文章の中で、①の部分は、どんなはたらきをしていますか。

- 1 ツバメとガンはそれぞれ住む場所がちがうことを説明するはたらきせつめい
- 2 鳥の「渡り」ということの意味を知らせるはたらきわた
- 3 モズはツバメやガンのように長い旅ができないことを知らせるはたらき
- 4 季節が変わるとすべての鳥はすむ場所を変えることを説明するはたらき

五 この文章を書いた人は、小鳥の「渡り」についておもにどんなことを説明しようとしているのですか。

- 1 小鳥が、昼間はえさを求めるわけ
- 2 小鳥の目が、夜はあまり見えないわけ
- 3 小鳥が、夜、「渡り」をするわけ
- 4 小鳥が、安全に「渡り」をするわけ

六 この文章で説明しようとしていることをよくあらわす題をつけたいと思います。つぎのうちからえらぶとすれば、どれがよいですか。

- 1 「渡り」の時刻 じこく
- 2 鳥の旅と鳥目
- 3 小鳥のむれ
- 4 鳥と光線

七 小鳥たちは、なぜ、そのように夜わたっていくのであろうか。 という文に対する説明をしているのは、つぎのどれですか。

- 1 ④と⑥と⑦の部分
- 2 ④と⑦と⑧の部分
- 3 ⑤と⑥と⑦の部分
- 4 ⑥と⑦と⑧の部分

(I の 3)

本文〔一〕を読んで、つぎの問いに答えなさい。

一 鳥の「渡り」ということはどういうことですか、かんたんに説明しなさい。

二 鳥の「渡り」をする時刻はいつごろでしょうか。

三 この文章の中に、もっとたいせつなことは、とありますが、

(1) どういうことが、どういうことにくらべて、もっとたいせつだといっているのですか。

(2) それは、どういうことについて、そのようにいっているのですか。それを述べていることばを文中にさがして、そのところを書き出しなさい。

四 この文章の中の⑥の部分は、全体としてどんなことをのべているのですか。

つぎの中からいちばんよいものを一つだけえらんで、その番号を○でかてみなさい。

- 1 長い旅をする小鳥たちは、昼間えさを食べなければならないということ。
- 2 飼っている小鳥は、なぜ食べどおしにえさを食べるかということ。
- 3 長い旅行をすると、胃はたちまちからになってしまうということ。
- 4 夜になれば、小鳥たちは、えさをさがすことができないということ。

五 この文章の中の⑤から⑧までの部分は、④の部分の説明になっています。

④の部分は、ア(小鳥たちは……いくのであろうか。) イ(鳥の目は……旅をしているのであろうか。) 二つの文からなりたっています。

⑤⑥⑦⑧の部分は、それぞれア、イのどちらの説明になっているでしょうか。()の中に、ア、イ、どちらか、あてはまる方を書きいれなさい。

⑤の部分() ⑥の部分() ⑦の部分() ⑧の部分()

(I の 4)

本文〔一〕を読んでつぎの問いに答えなさい。

(前にした問題と同じ問題、あるいはそれによく似た問題が出ていますが、前のときの答とちがってもかまいません。よく考えて答えなさい。)

一 この文章の中で、①の部分は、どんなはたらきをしていますか。つぎの中から、いちばんよいものを一つだけえらんで、その番号を○でかこみなさい。

- 1 ツバメとガンはそれぞれ住む場所がちがうことを説明するはたらき
- 2 鳥の「^{わた}渡り」ということの意味を知らせるはたらき
- 3 ズはツバメやガンのように長い旅ができないことを知らせるはたらき
- 4 季節が変わるとある種の鳥はすむ場所を変えることを説明するはたらき

二 この文章の中に、もっとたいせつなことは、とありますが、何にくらべてたいせつなのですか。つぎの中から、いちばんよいものを一つだけえらんで、その番号を○でかこみなさい。

- 1 小鳥たちをおそろタカなどが、夜ねむっていること
- 2 ふだんは、林や森の間にかくれて生活していること
- 3 夜のやみが、おそろしい敵^{てき}から守ってくれること
- 4 夜空にめくらの旅をしようとする事

三 この文章の⑥の部分はどういうことについて述べているのですか。⑤の部分とのつづきで考え、⑤の部分の中のどのところをくわしく説明したものが、そのところを書き出しなさい。

四 小鳥たもは、なぜ、そのように夜わたっていくのであろうか。という文に対する説明をしているのは、つぎのどれですか。いちばんよいものを一つだけえらんで、その番号を○でかこみなさい。

- 1 ④と⑥と⑦の部分 2 ④と⑦と⑧の部分
- 3 ⑤と⑥と⑦の部分 4 ⑥と⑦と⑧の部分

五 この文章で説明しようとしていることをよくあらわす題をつけたいと思います。あなたの考えた題を書きなさい。

(Ⅱ の 1)

本文 (二)

庭に一本のなしの木がありました。このなしの実は、^{みぢけ}水気が少なく、のみこむとむねがつまりそうでした。それで、わたしたちは、このなしのことを「むねつまりなし」といていたのです。

わたしが、六年生の年の秋のころでした。母は、⁽¹⁾にわかにからだが弱くなり、まもなく町の病院に入院しました。

つぎの日も、そのつぎの日も、母はもどってきません。家の中はひっそりかんとして、なんだか風がふきとおるようで、へやの中にいる気持ちもしません。わたしは、弟となるべく外で遊んで、気をまぎらわしていました。

ある日のことでした。落ち葉のしきつめた家のまわりや、庭のあちこちを、⁽²⁾わざとかまこそ音をさせながら歩きました。すると、

「にいさん、このきくの花、かあさんのところに持っていくか。」

弟が庭のすみにさいている白ぎくの花を見て、言いました。わたしも、母に会いたくてしかたがありません。

「うん、そうしよう。ぼくは、あの『むねつまりなし』を持って行こう。」

弟は、目をかがやかして、白ぎくをおりました。わたしは、なしの木に登って、「むねつまりなし」の実をもいでは、かごに入れました。そして、ふたりは、病院にでかけました。

家から町に出るまで三キロメートルほどもあり、町へは行ってから病院まで、また二キロメートルもあるので、ふたりは、いいかげんつかれました。

やっと、大きなれの木のそばにある病院に着きました。

おしえられたところを、ふたりは走るようにして行くと、へやの入り口には、母の名が書かれてありました。ドアをおしあけて中をのぞくと、母はベッドの上ですわったままうつむいていました。まくらもとに、父がこしかけていました。母は顔をあげてこちらを見て、何か言おうとしましたが、タオルでちょっと目をふきました。母の顔を見たら、わたしは、のどがつかえました。

弟は、持ってきたきくの花を母のはな先にさし出しました。

「まあ、いいものを持ってきてくれたのね。」

母は、においをかぐようにきくの花をだきかかえました。父は、へやのすみにあった花びんに水をそそぎ、それへきくを入れました。

母は、わたしのぶらさげていたかごを見つけて、言いました。

「おまえの持っているのは、なあに。」

わたしは、だまって母の前にかごをひっくりかえしました。「むねつまりなし」がころころとろがりだしました。

「まあ、まあ、——。」

このおみまいには、母も声をたててわらいました。父もわらいました。母は手をのばして、その一つを手にとってはおにくっつけ、

「気持ちのいいこと、ひやひやして、——。」

母のほおは、うすべにをさしたようにほてって、きれいに見えました。

(Ⅱ の 2)

本文〔二〕を読んで、つぎの問いに答えなさい。

一 にわかに ⁽¹⁾ ということばはどのような意味ですか。

二 この文章の中に わざとかさこそ音をさせながら歩きました。とありますが、なぜ、そんなことをしたのですか。

三 母親と、こどもたちとは、それぞれどんな気持ちでいるのでしょうか。また、それは、本文のどんなところでわかりますか、つぎのわくの中に書きなさい。

こどもの気持ち	その気持ちのでているところ

母親の気持ち	その気持ちのでているところ

四 この文章であなたがいちばん強く感じたところはどの部分ですか。

(Ⅱ の 3)

本文〔二〕を読んで、つぎの問いに答えなさい。

一 この文章の中の にわかに ⁽¹⁾ の意味はつぎのどれですか。いちばんよいものを一つだけえらんで、その番号を○でかこみなさい。1 わけもなく 2 すっかり 3 すこしずつ 4 きゅうに

二 この文章の中に わざとかさこそ音をさせながら歩きました。とありますが、なぜ、そんなことをしたのですか。つぎの中から、いちばんよいものを一つだけえらんで、その番号を○でかこみなさい。

- 1 遠い病院にいる母親に、落ち葉をふむ音をききとどけさせようと思って
- 2 かさこそと音がでるほど落ち葉を強くふみしめると、庭や、道が歩きよくなるので
- 3 母親の病気ままいに行きたいのに、病院が遠いため行かせてくれなくてやしさをまぎらわすために
- 4 母親のいないさびしい、たよりない気持ちをまぎらわすために

三 この文章を読んで、親子のどんな気持ちやようすがわかりますか。つきの中から、いちばんよいものを一つだけえらんで、その番号を○でかこみなさい。

- 1 病気の母を心配するきょうだいの気持ちと、むじゃきな子どもたちのみまいをうれしく思う両親のようす
- 2 遠い道を歩きとおしたきょうだいがまん強さと、母の病気がなおらないでこまっている両親のようす
- 3 父と母のいない家をるすばんできないきょうだいの気の弱さと、みまいに来たことをよここんでいる両親のようす
- 4 みまいの品物をよく思いついたきょうだいのかしこさと、重い病気をかくしてむりにわらっている両親のようす

(Ⅲ)

次の作文を読んで、あとの1, 2, 3, 4, 5の問いに答えなさい。答えは、ア、イ、ウ、エの中から最も適当なものを一つずつ選んでその記号を○で囲みなさい。

A

① もっとも、長所、短所といっても、その判断は、あんがいむずかしい。自分では、長所と思っ
ていても、他人は、B そうはみてくれないかもしれない。反対に、自分が、短所と
考えていることでも、他人は、長所とみていることもあるだろう。わたしは、みんなから、
「すなおだ。」とか、「のんびりしている。」とかいわれる。これは、いったい長所なのだろ
うか、それとも短所なのだろうか。

② まず、長所であるが、それは、やはり「すなお」ということのようなのである。母も、「わがま
まをいわないし、我をとおさずに、人の忠告をよく聞く。」とか、「がまん強いところがある。」
とか、いつてくれる。

C

③ ふだん、父や母にきからったようなおほえはあまりない。また、はらのた
つような時でも、がまんをして、けんかなどをしないように心がけている。これらのことは、
長所として考えていいことであろう。

④ 次に、短所であるが、それは、「のろま」ということだ。⁽¹⁾母にたのまれた用事なども、ぐ
ずぐずしている間に、弟がしてしまうことがよくある。⁽²⁾さらによく考えると、仕事がおそい
だけではなさそうだ。⁽³⁾実行力がないことも、短所として数えなければならぬであろう。

⑤ 母は、「人は、だれでも、自分をみがこうと努めることがだいじです。」と、ときどきいう。
短所を少なくしようと努力することがりっぱなのだということらしい。わたしは、この母のこ
とばを、しっかりとむねにきざもう。そして、少しずつでもいいから長所をのぼし、短所をな
くすように努力しよう。⁽⁴⁾

1 ①の部分の A のところにあてはまる書き出しの文章としては、次のうちで、どれ
が最もよいでしょうか。

ア だれにでも短所はある。しかし、短所をなくすことはなかなかむずかしい。

イ 人間は他人の長所はほめたがらないが、短所は悪くいうくせがある。これはよいことではない。

ウ 人には、長所と短所がある。人として、長所をのびし、短所をなくすことがだいじなことである。

エ わたしは、「すなお」という長所をもっている。これは、わたしのたいせつなことからものである。

2 ①の部分の のところにあてはまることばとしては、次のうちで、どれが最もよいでしょうか。

ア 必ず イ いちいち ウ どんな場合も エ 必ずしも

3 ③の部分の のところにあてはまることばとしては、次のうちで、どれが最もよいでしょうか。

ア そういえば イ そんなときは ウ それにしても エ それにくわえて

4 ㊦ の中の文を、④の部分の▽の(1)、(2)、(3)、(4)の中のどこかに入れるとすれば、どこがよいでしょうか。

そのようなときは、「こんな短所は、はやくなくしたい。」と反省はするが、いまだになおっていない。

ア (1)▽

イ (2)▽

ウ (3)▽

エ (4)▽

5 次の の中の文を、この作文に書き加えるとすれば、どこが最もよいでしょうか。

そこで、わたしは、自分の長所と短所とをあらためて考えてみることにした。

ア ①と②の間

イ ②と③の間

ウ ③と④の間

エ ④と⑤の間

(2) 中学校第1学年

中一

(I の 1)

本文 (一)

人間は、道具をつくる動物であるといわれている。人間とほかの動物との大きなちがいは、人間が道具をつくり、道具を使うことだということである。人間は、自分の生きていく目的に合わせて道具をつくり、それを使って自然に順応したり、ときには自然をつくりかえることさえもできるのである。

ところが、人間以外の生物は、自然のおきてに従うよりほかに生きていくことができない。つまり、自然の環境に支配されて、そのいうとおりにしていなければならない。

熱帯の生物は、寒帯では生きていくのがむずかしい。水の中に住んでいる魚は、陸に上がったら死んでしまう。同じ魚のなかまでも、暖流に住んでいるものは、寒流の中では生きにくい。こ

れらは、いずれも、環境に支配されているからである。

そこで、人間以外の生物は、自分が住んでいるまわりの自然、つまり環境にさからわないで、できるだけそれにうまく合うようにして生きている。

① サボテンは、ふつうの木の葉のようなかたちの葉をもっていない。また、肉の多いからだをしている。これは、暑くてかわいたさばくで生きるのにつごうがいい。魚のからだは、両はしのがった、長いまるみのある形をしているのも、水の中の運動につごうがいいからである。鳥のからだについても同じようなことがいえる。

② からだの形だけでなく、からだのしくみも、その環境の中で生きていくのにつごうがいいようになっている。空を飛ぶ鳥は、できるだけ体重を軽くするために、食べ物を長く消化器官の中にとどめておかないようにすることがだいじである。そのために、鳥は、短い腸ちようをもっていて、空を飛びながらでもふんをすることができるようになっている。ラクダは、せなかのこぶの中に、しぼりをたくわえている。そして、たとえ長時間にわたって水が得られなくても、このしぼりによってある程度の期間、命をささえることができるのである。

このように、多くの生物は、環境につごうのいいからだをもっている。このことは、生物のからだそのものが、道具の役目をしているといってもよい。

だから、環境に大きな変化が起こって、自分のからだをそれに合わせることができなければ、その生物は死に絶えてしまうよりほかはないのである。

(I の 2)

本文〔一〕を読んで、次の問いに答えなさい。

一 この文章で、作者は、どういうことを言おうとしているのか、簡単に述べなさい。

二 自然のおきての意味に最も近いのは次のどれか。最も適当なもの一つ選んで、その記号を○で囲みなさい。

ア 動かしがたい自然のきまり

イ 恐ろしい自然の姿

ウ 変わりやすい自然のうごき

エ はげしい自然の移り変わり

三 ①の部分に述べられている三つの例は、からだの何がつごうよくできているというのか。次の中から最も適当なものを一つ選んで、その記号を○で囲みなさい。

ア からだの運動

イ からだの長さ

ウ からだの大きさ

エ からだの形

四 ②の部分は、①の部分に対して、どのような関係にあるか。次の中から最も適当なものを一つ選んで、その記号を○で囲みなさい。

- ア ①とならべて、もうひとつの面から、例をあげて説明している。
- イ ①とは反対のことを、例をあげて説明している。
- ウ ①の理由を、例をあげて説明している。
- エ ①を、さらにくわしく、くり返して説明している。

(I の 3)

本文〔一〕を読んで、次の問いに答えなさい。

一 ①の部分と②の部分で、作者はいろいろ具体的に説明しているが、この①②の部分に共通して作者がそこに言おうとしていることは、どういうことなのか。そのことが述べてある文句を本文中に見出して、それを左に書き出みなさい。

二 一の問題に引き続いて、特に①の部分と②の部分とは、それぞれ何について述べているのか。左に書きなさい。

①の部分——

②の部分——

三 ②の部分は、①の部分に対して、どのような関係にあるか。次の中から最も適当なものを一つ選んで、その記号を○で囲みなさい。

(この問題は前にもやりましたが、もう一度よく考えて答えなさい。)

- ア ①とならべて、もうひとつの面から、例をあげて説明している。
- イ ①とは反対のことを、例をあげて説明している。
- ウ ①の理由を、例をあげて説明している。
- エ ①を、さらにくわしく、くり返して説明している。

(II の 1)

本文〔二〕

三平^{さんぺいとうげ}峠を登りつめたとき、一郎^{いちろう}がわたしを呼んだ。

「尾瀬^{おせ}が見えるよ。おとうさん。」

「一郎、はじめに、から元気を出すと、あとでつかれるよ。山に来たら、ゆっくり歩くんた。はじめから終わりまで平均した速度でね。」

わたしは、一郎にそう言った。けれども、一郎は、わたしをあとに残して、どんどん登って行ってしまった。

「ゆっくり歩くんたといったら。」

そういうわたしの声が、自分ながら負けおしみのように聞こえた。わたしの息は、ひどくみだれていた。

尾瀬が見えるよという一郎の声を聞いて、わたしは、急に元気づいて足を早めた。ブナの木の森のはるか下のほうに光って見えるのが、尾瀬沼にちがいがなかった。ブナの森は、青黒く、沼の色は、銀をいぶしたようにしびい光を放っていた。それは、たしかに心がひやりとするような静かな風景だった。わたしは、この美しい風景に、たましいをうばわれそうになった。

「ヤッホー。」

一郎はひどくほらかな声を上げて、尾瀬沼をめがけて、峠の道をかけおりにいった。そのうしろ姿が、雪の日の子犬を思わせるように、ころころと見えた。

「一郎は、まだ、この静かな美しさを味わうことができないだろう。」

そう思いながら、わたしは、ゆっくりとおりにいった。峠をおりきった沼のほとりは、砂浜のようになっていた。大きな枯れた木の幹が、波うちぎわに、一本すてられたように横たわっていた。枯れた木のはだは、長い間雨風にさらされて白くなり、巨大な恐竜の化石のように見えた。さっきまで銀色に光っていた水のおもては、ここから見ると、あいを流したように濃い青によどんで見える。

一郎は、砂の上にねころんで、わたしを待っていた。

「どうだ、きれいなところだろう。」

わたしも、一郎のわきに腰をおろして休んだ。すると、一郎が言った。

「おとうさん。こうしていると、写真や映画で見るとちがって、けしきが生きているのがわかるね。けしきにも、人間の命みたいなものがあるんだね。ほく、このけしきを見ていたら、ふと大むかしの人に会ったような気がしたよ。」

わたしは、はっとした。この静かな風景の味わいは、一郎のようなこどもにはわからないだろうと思っていたのに、するどい感覚で感じとっているのを知って、はっとしたのだ。そして、わかるまいと、こどもをあまくみるおとなの自分がはずかしくなってきた。

(Ⅱの2)

本文〔二〕を読んで、あなたは、どういうところにいちばん強く心をひかれましたか、書きなさい。

(Ⅱの3)

本文〔二〕を読んで、次の問いに答えなさい。

一 この文章で、作者は主として何について書こうとしたのか。次の中から適当と思うものを二つ選んで、その記号を○で囲みなさい。

- ア 作者の疲れはてた気持ち
- イ 尾瀬沼の静かな美しさ
- ウ こどもの元気なようす

- エ 親子のしたしいあいだから
 オ こどものするどい感覚
- 二 こどもをあまくみるおとなの自分の意味に最も近いのは、次のうちどれか。最も適当なものを一つ選んで、その記号を○で囲みなさい。
- ア こどもはおとなほどのするどい感覚はないと思うおとなの自分
 イ こどもがかawaiiそうだと思うおとなの自分
 ウ こどもはおとなにあまえてばかりいると思うおとなの自分
 エ こどももおとなも同じ感覚をもっていると思うおとなの自分
- 三 こどもをあまくみる の「あまくみる」ということばの意味を書きなさい。

(Ⅲ)

小五 (Ⅲ)に同じ

(3) 中学校第3学年

中 三

(Ⅰ の 1)

本文〔一〕

- ① 時代は、活字文化からラジオやテレビジョンなどの電波文化へと移り変わりつつあるのではないかということがいわれている。だから、書物にとりかこまれた生活というようなものは、今日では、ごく特殊な職業に限られ、一般には時代おくれになっていくのだともいわれるだろう。いわゆる後進国では、交通もごく旧式の馬車や牛車の類と、ごく最新式の航空機とがあるだけで、その中間 入 のがあまり見られないという話であるが、いわゆるコミュニケーション(伝達)の手段として 入、活字よりも電波にたよるほうが多いとも聞いている。いわゆる活字文化、あるいは文字文化というものは、中間的、過渡的なものにすぎないだろうか。私たちは、ときどきそのような疑問にとらわれる。
- ② 昔は文字を間におかないで、口から口へとニュースが伝えられた。マラソン競走の起こりは、ベルシア戦争のときに、マラトンの勝利を伝えるための使者、あるいは伝令の者が現地から走ってきて、これをアテネ市民に伝えたところからきているなどといわれる。議会でも法廷でも、人々は演説や弁論によって、自分の考えを直接的に市民に訴えて、これを説得しなければならなかった。外交交渉でも、時によると、巧みな雄弁によって、その時その時の方針が急変させられて、とんでもない結果を招くこともあった。私たちは口と耳をつなぐだけのコミュニケーションが、しばしば感情的な要素によって支配されることを見るのである。

- ③ そのような弊害を少なくするためには、文字の媒介が有効であると考えられる。記録をとり、合意されたことがらについては、文書をつくっておけば、時によって矛盾したことを平気でしゃべるような、場あたりの演説家を沈黙させることもできる。V もし、私たちが、各種提案の内容や理由づけについて、あらかじめ文書にされたものを渡されているなら、これを何度も読みなおして、じゅうぶんにその趣旨を理解し、これにいろいろな方面から検討を加える余裕もできるわけである。だから、電波時代の到来によって、また昔の直接的な訴えが可能になってきたといっても、その危険や短所に対抗するものとして、活字その他の文字の役割もますますたいせつになってきているといわなければならないだろう。
- ④ 文字の発明ということは、人類の歴史にとっても画期的なできごとだった。それによって文学も可能になり抽象的な思考も発達してきたのである。口演だけにたよった物語や歌謡も、その台本が文字によって固定され、その楽譜が一定されることによって、より高度の発達が可能になったのではないかと思う。だから、私たちは文字文化をそう簡単に飛び越えてしまうこともできない。教育的には、文字に慣れ、文字を使う訓練というものが、その間接性によって反省も可能になるところから、人間形成の上にも、きわめてたいせつであるといわなければならないだろう。
- ⑤ ただしかし、耳で聞き、口でしゃべることばの 性は、段階としては最初のものであり、そのいきいきとした働きかけは、文字におきかえてしまうことのできないものをもっている。いわゆる電波文化の時代が文字文化を押しつけてしまうのではなく、その土台の上に、どのような新しい可能性を開拓していくか、それがこれからの課題であろう。

(I の 2)

本文〔一〕を読んで、次の問いに答えなさい。

- 一 段落①では、どのように論をすすめているか。簡潔に書きなさい。
- 二 段落③のVのところ、補うことのできることばとして、次のどれがよいか。最も適当なものを一つ選んで、その記号を○で囲みなさい。
- ア また
イ しかし
ウ たとえ
エ すなわち
オ それとも
- 三 段落②、③、④の部分に書かれていることが、次の中に一つある。それは、どれか。最も適当なものを一つ選んで、その記号を○で囲みなさい。
- ア 昔のコミュニケーションは、口から口へ伝えるという、中間的、過渡的な手段によって行なわれていた。
- イ 直接的な訴えによるコミュニケーションは、ややもすると感情的な要素によって支配される

こともある。

ウ 電波時代の到来によって、活字その他の文字の役割がそれほど重要視されなくなってきた。

エ 私たちは、口と耳をつなぐだけのコミュニケーションによって、簡単に文字文化を飛び越えることができる。

オ 抽象的な思考が発達してきたために、物語や歌謡が生まれるようになり、それが文字の発明の上にも大いに役だった。

四 段落⑤の に入れるものとして、次のどれがよいか。最も適当なものを一つ選んで、その記号を○で囲みなさい。

ア 中間

イ 固定

ウ 矛盾

エ 直接

オ 間接

(I の 3)

本文〔一〕を読んで次の問いに答えなさい。

一 段落①ではどのように論をすすめているか。次の中から最も適当なものを一つ選んで、その記号を○で囲みなさい。

ア いわゆる先進国と後進国とにおけるコミュニケーションの手段の違いを、まず具体例をあげて述べ、次になぜそう違うのだろうかという疑問を提出している。

イ 活字文化とラジオやテレビジョンなどの電波文化との比較を述べ、次に後者は中間的、過渡的なものにすぎないのではないかという疑問を提出している。

ウ 文字文化というものは中間的、過渡的なものにすぎないという例をあげ、次になぜ後進国が活字よりも電波にたよるほうが多いのかという疑問を提出している。

エ 活字文化はラジオやテレビジョンなどの電波文化に比べて時代おくれだという一部の人々の意見を紹介し、次に活字文化がさかんである現状に対する疑問を提出している。

オ 時代は電波文化に移り変わりつつあるといわれていることとそう思われそうな例をあげ、次に文字文化は中間的、過渡的なものかどうかという疑問を提出している。

二 段落③は次の四つの文からなりたっている。

A 「そのような……………考えられる。

B 「記録をとり、……………沈黙させることもできる。」

C 「もし、私たちが、……………余裕もできるわけである。」

D 「だから……………いわなければならないだろう。」

Cの文は、その前文A、Bの文に対してどのような関係にあるか。次の中から最も適当なものを一つ選んで、その記号を○で囲みなさい。

ア Bの文とならべて、もうひとつの面から、Aの文を具体的に説明している。

イ Bの文とは反対の面から、Aの文を具体的に説明している。

ウ A、Bの文で述べたことの原因や条件をくわしく述べている。

エ A、Bの文で述べたことをさらに具体的にくわしく説明している。

オ A、Bの文で述べたことは全く別な問題を新たに述べている。

三 段落③のVのところ、補うことのできることをととして、次のどれがよいか。最も適当なもの一つを選んで、その記号を○で囲みなさい。

(この問題は前にやりましたが、その時の答えにとらわれずに、もう一度よく考えて答えなさい。)

ア また

イ しかし

ウ たとえ

エ すなわち

オ それとも

(Ⅱ の 1)

本文〔二〕

再びパリを見るのはいつのことかと思っ出て来たあの都のほうへ、もう一度帰って行く自分の心持ちはかなり楽しみでもあった。

夜行列車にはボルドーの町の人らしい父親に連れられてある専門学校へはいりに行くという兄弟の二青年に乗り合わせ、車中の無聊^{ぶよう}を慰めた。私と差し向かいに腰かけていた青年はしきりに国のほうのことを聞きたがって、私の住まいは日本のどこにあるかということなどを尋ねた。

「東京？」

とそのボルドー生まれの青年は目を輝かして、地理書で読んだ日本の都の名が私の口から出ただけでも珍しいという様子をした。その青年はさらにこんなことを言いだした。どこの土地にもその土地のものには特別な呼び方がある。たとえばボルドーの人はボルドーレー、リオンの人はリオンネー、リモージュの人はリムーザンと呼ぶように。それと同じような意味で東京の人は何と呼ぶかと私に尋ねた。

「東京っ子ということばがありますよ。その中でも純粋な町の人たちのことは、江戸っ子と呼んでいます。」

と私が話し聞かせたら、青年は江戸っ子ということばを一つ覚えたというふう喜んで、フランス人らしい発音のしかたで「江戸っ子、江戸っ子。」と珍しそうにくり返した。

「なんですか、きみもその江戸っ子ですか。」とまた青年が私の顔を見て言いだした。

「どうしまして、私は子どもの時から東京に住みましたが、江戸っ子ではありません。私は山国のほうの生まれのものです。」

こう私が答えると、青年のそばに腰かけていたフランス人は父親らしい調子で自分のむすこに向

かって、

「え、あちらはどこの生まれだとおっしゃる。」

「山国の人ですとき。」

このむすこの答えを聞いて、父親は私のほうを見ながらうなずいていた。

窓の外は暗かった。車中のものは皆疲れてきた。眠ろうとしたがろくろく眠れなかった。

やがて汽車の中で夜が明けかかった。ときどき私は窓ぎわへ行って立って見た。暗くてよくわからなかった遠い雲の端が赤く光ってきたのを望んだ。あそこに森がある、ここに牧場がある、と言うことができるようになった。野はわずかに眠りからさめかけたばかりで、丘の立ち木も半ば夢を見ていた。何もかもまだ朝の床の上にあって、目をさましたまま休息の姿勢でいるかのように静かであった。

夜はしだいに私からも離れていった。そこいらが白々と明けていくにつれて、なんとなく自分の心持ちもはっきりしてきた。日の出だ、と汽車の窓から望んで見ると、地平線のかなたには朝もやが深く立ちこめていて、その間から太陽が赤く見え始めた。寝不足でからだはぞくぞくしていたときだから、まだそれほど輝かない朝日をまともに見ていくということもうれしく、目を放さずにいることもできた。しだいに丸い全体の輪郭が現われてきた。あたかも遠く銅盤を掛けたかのようになった。車室のすみに疲れて黒い毛皮の外套にくるまっていた婦人まで立って美しい日の出を望んだ。調子を破った音楽のような飛躍が感じられるとともに、太陽は一気に地平線を離れていった。私はもっとよく見ようと思った。私の日は痛くなるほど太陽を追った。なんというまぶしい光彩と、さかんな精力と、野蛮な舞踏とが私の凝視を拒んだろう。しまいにはどうしても目を放さずにいられなくなった。車中の人々はいずれも争って窓を明け、さし入る日光に接したり、清い空気を吸おうとしたりした。

(Ⅱ の 2)

本文〔二〕を、読んで、次の問いに答えなさい。

一 この文章で、作者はどんなことを語ろうとしているのか、述べなさい。

二 この文章全体をとおして、「私」のどんな気持ちが描かれているか述べなさい。

三 この文章では、夜明けの情景を、どのように描いているか。次の中から最も適当なものを一つ選んで、その記号を○で囲みなさい。

ア 近景から遠景へという描写の方法をとり、なお、作者の気持ちを車中の人々の気持ちに対比させながら描いている。

イ 朝の空のけしきを先に描写して、近景から車中へと目を移して描いている。

ウ 日の出の瞬間の、車外の遠景、近景を互いに織りまぜて描いている。

エ しだいに眠りからさめる遠近の風景や作者の心の動きを、日の出の様子に盛り上がりをもた

II 文章読解の基礎的問題

1 語句の意味用法の理解

文章読解の基本は、その文章を構成しているひとつひとつの語句の正しい理解から始まらねばならない。こうした語句の理解がどのようなものであるか、最初にこの語句の問題を取り上げてみたい。以下個々の具体的問題に即して考察をすすめてゆく。

(1) 小五 — ① (小学校第5学年, 大問 の小問一, 通し番号①を意味する。以下同じ)

この文章の中の <input type="checkbox"/> の中に入れることばとしては、つぎのどれがよいですか。
1 たとえば
2 ところが
3 あるいは
4 つまり

	[応答率]			
	全国	本県	応答調査	Iの2-1
1			18.5	18.1
2	61.3	57.7	49.7	59.1
3			12.7	7.0
4			19.1	12.9
無答				2.9

調査対象校の正答率は、6月の全国学力調査の時は本県平均のそれよりもはるかに低く50%を割っていたが、9月、分析の問題で、全く同一の問題(Iの2-1)を課したところ、その正答率は10%近く上昇し、本県正答率を上回り、本県平均と全国平均のはぼ中間に達した。概して同一問題を9月に課した場合、それが6月実施のものよりも正答率が上昇することは、他の問題についても同様の傾向が見られる。おそらく、3か月前に同じ問題に接していること、3か月間の自然の学力の伸び、また調査の受検環境の違い等、いろいろな要因が考えられる。ただ、この問題では、6月と9月とその応答傾向はほぼ似通っており、3と4の選択肢への応答がそれぞれ6%前後減少しただけである。いま分析的問題(Iの2-1)について、平素の国語成績5段階別に各選択肢の応答数を調べてみると次のごとくである。

表1

1の2 成績	1	2	3	4	無答	計
5		13		1		14
4	2	25	2	8		37
3	15	47	4	11	4	81
2	11	12	6			29
1	3	3		2	1	9
X		1				1
計	31	101	12	22	5	171

(数値は実数。成績欄のXは中途編入のため成績未詳のもの)

正答肢2を選択したものについて、5段階別選択者の5段階それぞれの人数に対する百分比をみると、次の通りである。

(成績)	5	4	3	2	1	X
(%)	93	68	58	41	33	100

これでみると、選択肢2(「ところが」)を選んだ正答者は上位群のものほど多いことがわかる。つまり、「たとえば」「ところが」「あるいは」「つまり」とい

うことばの正しい用法を理解し、この本文の場面で適用し得たものが、上位群ほど多いことがわかる。このことは、こうした語いの理解というものが、国語学力の基礎になっていることをおのずから物語るものであろう。

ところで、2の正答肢のほか、1と4の選択肢にもかなりの応答が見られる。

1の選択肢（「たとえば」）を選んだものは、本文の「たとえば、大形のカモ、ガン、……」にひかれて、「たとえば、小鳥の類は、……」としたのであろう。こうした言い方も、ややきこえない感はあるが、成立しないわけではない。この文章には「たとえば」が3か所使っている。

1 ①段の中

ツバメやガンのように、遠くのほうからやってきて、また、遠くのほうへ帰っていく鳥ばかりではなく、たとえば、モズのように、秋になると平野へおりてきて、春や夏は山にすんでいる鳥もある。

2 ②段の中

鳥が「渡り」をする時刻はいつごろであろうか。たとえば、大形のカモ、ガン、コウノトリ、ハクチョウなどのようなもの、また力の強いタカなどは、昼間でも「渡り」をおこなう。、小鳥の類は、たいてい夜間にむれをつくってわたる。

3 ③段の中

一つには、夜のやみがかれらをおそろしい敵から守ってくれるからである。たとえば、小鳥たちをおそうタカなどは、夜はねむっている。

1の場合は、たとえば、モズのようにと呼応する語があって、その「たとえば」は前文とは関係なく、単にモズを例示したにとどまっている。これに対して3の場合は、たとえば、小鳥たちをおそうタカなどは、と、やはりタカを例示したとも見られるが、むしろ、「小鳥たちをおそうタカなどは、夜はねむっている。」という文全体が、「夜のやみがかれらをおそろしい敵から守ってくれるからである。」の具体例として述べられたものと解する方が自然であると思われる。つまり文全体が前文の例示と見なされる。ところで2の場合は、「たとえば、大形のカモ、ガン、コウノトリ、ハクチョウなどのようなもの、また力の強いタカなどは、」と呼応した語があるので1の例と同じ用例と解される。それが、この場合の正しい解釈かと思われる。しかしながら、「鳥が「渡り」をする時刻はいつごろであろうか。たとえば、……」という語気には、「たとえば」以下の文が、前文を具体的に説明する（この場合、それはそのまま「……時刻はいつごろであろうか。」の答えになる。）3の用法とも思われるふしが含まれている。この文章の作者の筆づかいから見ると、このへんがややあいまいな感じがするのである。もし、の中に「また、たとえば」ということばを置いてみると、3の用法として、すなおに読まれるのである。選択肢1には「また」がなく、単に「たとえば」とあるので、そこに舌足らずのぎこちない感じを免れないのであるが、1の選択肢（「たとえば」）をここに入れたものは、おそらく多少のぎこちなさを覚えながらも、以上述べたような解釈（「たとえば」を前文の例示とみる）のもとに、そのように感じて、これを選択したものと思われるのである。

4の選択肢（「つまり」）は3の選択肢（「あるいは」）同様、この場合不適切であることは、一目瞭然である。にもかかわらず4の選択者には上位群のもの（4段階）がかなり多いのが注目される。これ

は全くの推測に過ぎないのだが、この文章全体が小鳥の渡りについて展開されており、「小鳥の類は、たいい夜間にむれをつくってわたる。」ということばはこの文章の内容から見てきわめて重要な主題的内容を示すものであり、かつ、段落の終りにあるので、「つまり」という語は結論を導く語という理解のもとに、深くも考えず、これを選択したのではあるまいかと思われる。「つまり」という語が、前に縷々述べてきたところを要約して言えばというような場面で使用される語であるということを、文章の具体的場面ではっきりと理解していないところから、こうした誤答が生れたものと考えられる。「つまり」という語は基本語いとして小学校上学年で学習する語いであって、その用法に十分習熟していないのも肯けることである。

この出題は、そのねらいを「文脈の中における文と文との関係の理解」としているが、結局はこの四つの語を文章の具体的場面で適用し得るかどうかの問題である。これら四つの語の意味用法が正しく理解されているかどうかの問題である。

(2) 小五 二 - ⑧

この文章の中の(1)にわかに の意味は、つぎのどれですか。

1 わけもなく 2 すっかり

3 すこしずつ 4 きゅうに

〔応答率〕				
	全国	本県	応答調査	Ⅱの3-1
1			15.6	8.8
2			15.6	7.0
3			23.1	36.8
4	47.7	51.3	44.0	47.4

この問題は、「……母は、(1)にわかにからだが弱 無答
くなり、まもなく町の病院に入院しました。……」

という文中に出てくる「にわかに」という語の意味をたずねたものである。もしこの部分が空欄になっていて、適切なことばを入れよというような出題であるならば、ここへ選択肢の「わけもなく」「すっかり」「すこしずつ」「きゅうに」どれを入れても、この本文は文章として成立するであろう。したがってこの問題は、前後の文脈からこの語の意味を推定し得べきものではなく、「にわかに」ということばの意味を知っているかどうか、解答のカギである。

そこで、分析的問題では、この問題に先立って、まず「にわかに」ということばの意味を自由記述で問うてみた。

(Ⅱの2)-
にわかにということばはどのような意味ですか。

この問題の応答を、調査問題の選択肢1, 2, 3, 4に対応させて類別し記すと、次のようになる。(5, 6はその他の答えである。ただし内容的に3に近いであろう。)

1 (わけもなく)……………	かんたんに	1	}	4 (2,3)
	しらないうちに	1		
	しぜんに	2		

2 (すっかり)……………	すっかり	3	} 5 (2.9)
	たいへん	1	
	ほんとに	1	
3 (すこしずつ)……………	すこしずつ	12	} 37 (21.6)
	だんだん	24	
	しだいに	1	
4 (きゅうに)……………	きゅうに	61	} 67 (39.2)
	とつぜん	1	
	すぐ	2	
	あっという間に	1	
	ぐっと	1	
	一日一日と	1	
5 すこし		7	} 8 (4.7)
	ほんのすこし	1	
6 ときどき		1	} 4 (2.3)
	ちょこちょこと	1	
	しずかに	1	
	うんわるく	1	
無意味……………		31	(18.1)
無 答……………		15	(8.1)

(数値は実数, ()内数値は全員に対する百分比)

この自由記述の問題では、171人中67人、39.2%のものが「にわか」にということばの意味を一応理解していたと見なされる。ただしこの場合も、実際にはこの語の意味を正しくは知らず、本文の中でその前後の文から推測して正答しているものもあるかもしれない。

この自由記述の出題の次に、別な問題紙で、調査問題と全く同じ問題で、つまり選択肢によって問うてみた。(Ⅱの3-1) その結果は最初に示した通りである。いまこの自由記述と選択肢との応答の関連をみると次のごとくである。(表2) 表2

Ⅱの2 \ Ⅱの3	1	2	3	4	計
1	3			1	4
2	1	4			5
3	1	1	30	5	37
4	5		7	55	67
5			8		8
6			3	1	4
無意味	4	5	11	11	31
無 答	1	2	4	8	15
計	15	12	63	81	171

(数値は実数)

この表で見ると、自由記述(Ⅱの2-1)で1, 2, 3, 4の応答者は、それぞれその7.5%, 8.0%, 8.1%, 8.2%が、選択肢(Ⅱの3-1)で1, 2, 3, 4を選んでいる。自由記述の5, 6は、選択肢3に近い内容のものであるから、そのほとんどが選択肢3を選んだのは当然であろう。自由記述では正答4に属する応答者67人のうち、選択肢でも4を選んだものは55人であり、それは全員の32.2%に当たる。したがって、自由記述で正答したもの

67人のうち、少くとも、選択問題で4以外に回答した12人のものは、「にわか」に」という語の意味を、たとえ自由記述で正答しているとはいえ、正確に単語の意味として知っていたわけではなく、文脈の中で推測して答えていたものであることが知られる。そしてこのことは、前にもちょっと述べたように、両者に正答した55人の中についても、55人すべてがこの語の意味を正確に知っていたとは、必ずしも断言できないのである。しかしとにかく、自由記述でも選択肢でもいづれでも正答したということは、この語を少くもこの文章の中で、より確実に捉えていたと言えると思う。

さらにⅡの3-1の各選択肢

表3

応答者を平素の国語成績5段階別にみると、表3の通りである。

この表で見ると、上位群のもの必ずしも正答しているとはきまっていない。選択肢の3と4とは、全段階を通じて全く二分している。(ただし、3段階のものは4に多く傾いている。

Ⅱの3 成績	1	2	3	4	計
5	1		6	7 (5)	14
4	1	4	19	13 (10)	37
3	8	2	21	50 (36)	81
2	3	3	14	9 (4)	29
1	2	3	2	2	9
X			1		1
計	15	12	63	81 (55)	171

数値は実数
()内数値は、自由記述の応答(Ⅱの2-1)も4に属するもの
成績欄のXは途中編入のため成績未詳のもの

以上述べてきたことから推測できることは、この「にわか」に」という語の意味を確実に知っていたものは、171人中55人(32.2%)、もしくはそれ以下のものであったと考えられる。多くのものは、この語の前後の文や全体の文章内容から推察して回答したものと思われる。実際にこの問題の解決に当っては、「にわか」に」という語の客観的意味を知っていなければ、その文章内容からの推察を裏付け決定する何もも得られない筈である。この出題のねらいは、一応「文脈の中における語句の意味の理解」となっているが、この問題は、文脈の中で語意を決定しようというような問題でなく、この語の意味を知っているかどうかの問題なのである。そして実はこのことは、読解指導における語いの扱いという甚だ大切な問題にかかわる。文章を読解するという立場から、とかく文脈の中で語意を探らせようとする指導が多く見られるが、こうした指導には問題があると思う。文章の構成単位としてそれぞれの単語は最も基本的なものであって、その客観的な意味用法を確実に身につけるということは、文章読解の基本でなければならない。そうした知識を確実にもっていて、始めて文章の中で具体的にその語の意味を生き生きと捉えることができるのであり、その語を含む文や文章の理解も真に可能になってくるのである。「にわか」に」という語は、「教育基本語い」によれば、小学校高学年で、もっとも重要度の高い(B1)語いであって、もう少しできてよいのではないかと思う。こうした語いの知識の乏しきは、国語教育上気にかかることである。

同様のことが、次にかかげる問題でも言えるようだ。

(3) 中一 1 ①

自然のおきての意味に最も近いのは、次のどれか。	
ア	動かしがたい自然のきまり
イ	恐ろしい自然の姿
ウ	変わりやすい自然のうごき
エ	はげしい自然の移り変わり

〔応答率〕				
	全国	本県	応答調査	Iの2二
ア	48.0	47.1	50.3	50.
イ			15.3	10.4
ウ			23.0	28.1
エ			10.9	11.0
無答			0.5	0.5

この分析的問題として行なったIの2二について、平素の国語成績5段階別に、各選択肢の応答数を調べてみると次のごとくである。

表4

Iの2 成績	ア	イ	ウ	エ	無答	計
5	13	2		3		18
4	22	4	8	1		35
3	43	7	24	8		82
2	10	4	12	6		32
1	2	2	7	2	1	14
X	1					1
計	91	19	51	20	1	182

(数値は実数。成績欄のXは途中編入のため成績未詳のもの)

正答肢アを選択したものについて、5段階別選択者の5段階それぞれの人数に対する百分比をみると、次の通りである。

(成績)	5	4	3	2	1	X
(%)	72	63	53	31	14	100

上位群ほど正答率が高くなるのは当然のことであるが、語いの知識、理解度が国語全般の学力と深い関係のあることが推測される。ところで、この「おきて」という語は基本語い表によれば小学校高学年の重要度の高い語いであって、中学1年としては、もっと正答

率が高くあってよいはずである。

ところが、人間以外の生物は、自然のおきてに従うよりほかに生きていくことができない。つまり、自然の環境に支配されて、そのいうとおりになっていないなければならない。

という本文からいって、「つまり」以外の文から推測しても「自然のおきて」の解釈としてアが最も妥当であることは、いうまでもないが、それも「おきて」という語意を知っての上でのことであって、もし、全然「おきて」ということばの意味を知らないとすれば、「自然の環境に支配されて」ということばからは、イ、ウ、エのような選択肢の内容も一概にここに当てはまらぬと、決めてしまうわけにはゆかない。つまり前後の文章からだけでは、アを絶対的なものとして決定しがたいのである。一体、文脈の中で文中の語意を決定するというのは、その語いにいろいろな意味用法のある場合、その文中で使われている用法がそのどれに当たるかを決定すべき問題であって、その時始めて文脈がその語意を決定することになる。そしてその文章の具体性に即してその語の微妙な意味あいのはっきりと理解されることになる。この場合のように、選択肢ア以外は「おきて」の解釈としてあてはまらないというような場合には、この問題の解決には何よりも「おきて」という語の正しい客観的な語意の理解が先決である。この語の意味を正しく理解することによって、この文章の意味のはっきりと理解されるのである。実

際読解指導において、逆に考えてはいけない。前に述べたようにこの小学校高学年で学ぶ「おきて」という語いの理解度の低いこの結果は、平素の読解指導において、その語意の客観的正確な意味理解を後にし、いたずらに文章から語意を推測するというような、逆の取扱いが、こうした結果をもたらしているのではあるまいか。

次に多分に比論的な言いまわしや、そうした語句については、前後の文や文章全体からその意味を推察しやすくなるので、そうした語句の問題は、ずっと正答率が高くなる。次の三つの例はそうした問題である。

(4) 中一 2 2 ⑦

たましいをうばわれそうになった。は、作者のどんな気持ちをあらわしているか。

ア 追いつけられなかったので、くやしくて心がみだれている気持ち

イ あまりつかれて、息ぐるしく、たおれそうになっている気持ち

ウ あまり静かなので、心がさびしくなっている気持ち

エ けしきがあまりきれいなので、うっとり見とれている気持ち

〔応答率〕			
	全国	本県	応答調査
ア			1.6
イ			6.6
ウ			9.3
エ	81.8	83.1	82.5

(5) 中一 2 3 ⑧

雪の日の「犬」ということばで、一郎のどんな様子をあらわそうとしているか。

ア 一郎のからだの小さい様子

イ 喜びと元気があふれている一郎の様子

ウ めあてもないのに走っていく一郎の様子

エ 一郎のまっ白いシャツの美しい様子

〔応答率〕			
	全国	本県	応答調査
ア			9.3
イ	77.6	78.8	77.6
ウ			10.9
エ			2.2

(6) 中一 2 5 ⑩

こどもをあまくみるおとなの自分の意味に最も近いのは、次のうちのどれか。

ア こどもはおとなほどのするどい感覚はないと思うおとなの自分

〔応答率〕				
	全国	本県	応答調査	Ⅱの32
ア	59.0	59.2	56.8	64.8
イ			5.5	2.2
ウ			4.9	7.7
エ			32.8	25.3

- イ こどもがかわいそうだと思うおとなの自分
 ウ こどもはおとなにあまえてばかりいると思うおとなの自分
 エ こどももおとなも同じ感覚をもっていると思うおとなの自分

この問題も正答率はかなり高いのであるが、エの選択肢への反応がかなり見られるので、分析的問題で取り上げてみた。9月実施の時(Ⅱの3二)にはその正答率が6月時(応答調査)に比べて8%上昇している。そしてエの応答は7.5%減ったとはいえ、やはり相当多く、25%をこしている。いまこのⅡの3二の応答者の平素の国語成績を5段階別に見ると、次のごとくである。

表5

Ⅱの3 成績	ア	イ	ウ	エ	計
5	17			1	18
4	30			5	35
3	53	2	7	20	82
2	14	1	3	14	32
1	3	1	4	6	14
X	1				1
計	118	4	14	46	182

正答肢アを選択したものについて、5段階別選択者の5段階それぞれの人数に対する百分比をみると、次の通りである。

(成績)	5	4	3	2	1	X
(%)	94.4	85.7	64.6	43.8	21.4	100

(数値は実数。Xは中途編入のため成績未詳のもの)

これで見ると、上位群のものは圧倒的にアに反応していることが知られるが、エの選択肢にも上位群のもの数名が反応している。アとエの選択肢は内容的に言えば、同じ内容の肯定、否定の関係にあるので、何故25%もエに反応するのか、疑問を感ぜざるを得ないのである。そこで、この「あまくみる」ということばを自由記述で問うてみた。

(Ⅱの3)三

こどもをあまくみるの「あまくみる」ということばの意味を書きなさい。

この問いに対する応答として、「かるくみる」「かるく考える」「かるがるしくみる」「あいてをばかにする」「なめる」「ようちにみる」「かんたんにみる」「たやすくみる」「ゆだんする」「自分よりすぐれてないと思う」「たいしたことはないと思う」等がみられる。これらと、さらにこの場面に即してもっと具体的に書いたもの「あの子はどうせこの美しい風景をみたってわからないだろう。」というようなものを含めていうならば、それが全体の65%を占めており、それらの生徒はこのことばの意味をほぼ理解しているものと思われる。ところで、この自由記述での正答範囲に入るものと、Ⅱの3二の選択肢の問題で正答肢アを選んだものを比べてみると、それは必ずしも一致しないのである。正答肢アを選んだもので、この自由記述では全く無意味な解答をしたり、「あまやかす」「かわいがる」等と誤答しているものは、その約27%に及んでいる。そして一方、エの選択肢を選んだものについて、その自由記述の応答をみると、その中の57%のものは「あまくみる」ということばを正答範囲で答えて

いる。この二つの問題が同一の問題紙(Ⅱの3)の隣り合った問題として出ていることを思えば、「あまくみる」ということばを自由記述で正答しながら、(つまり、この語を一方では理解しながら)選択の問題では正答肢アをとらずにエをとったということは、それなりの何か理由があるのではあるまいか。

以下は全くの私の推測に過ぎないのだが、おそらく、この問題の本文から、こどもはおとなよりも新鮮な、鋭い感覚を持っているのにはっとしたというように感じ取ってしまって、「こどもをあまくみるおとなの自分」に対して、「こどももおとなと同じ感覚をもっていると思うおとなの自分」をはずかしく思った、というふうに解したのではあるまいか。このエを選択した上位群6人(5と4の段階)のものは、いずれも自由記述では正解しているのである。同一紙の隣り合った問題で、「あまくみる」の語意がわかっていながら、一方、アの選択肢を取らないでエの選択肢を取った理由は、以上のようにでも考えなければ、筋が通らなくなる。もっとも、こどもの答案には、一貫した論理的筋の通らない、問題ごとにその場その場での思考で解答しがちであることは、しばしば見られるところであるから、必ずしも当たらないかもしれないが、アの正答肢とは内容的には大へん近い、しかしまた正反対の、エの選択肢の性質から言って、その反応がかなり多いこと、しかも上位群のものも数名選択している(しかもそれらが自由記述で、その語意を正解している)ことは、何かそこに理由があってしかるべきだと思うのである。以上述べたような推測も一つの解釈として許されてよいかと思う。とするならば、それらの人たちは、文章全体から直観的にその内容を把握してしまって、一つ一つの文を詳しく吟味しない読みからくる一つの誤答の例といえるかもしれない。

(7) 中三 ① 4 ④

段落⑤の に入れるものとして、次のどれがよいか。

ア 中間
イ 固定
ウ 矛盾
エ 直接
オ 間接

〔応答率〕				
	全国	本県	応答調査	Iの2四
ア			7.6	7.0
イ			6.4	7.0
ウ			14.0	10.5
エ	55.9	53.7	58.0	64.4
オ			14.0	10.5
無答				0.6

この5箇の選択肢は、いずれも本文中に出てくることばである。その中、「中間」「固定」「間接」は、文字ないし文字文化の性質として、「矛盾」「直接」は、話しことばの性質として、その叙述に使用されている。本文全体を読めば、エ「直接」が正答肢であることははっきり理解できるはずである。なお、応答の傾向をみると、ウ「矛盾」とオ「間接」への反応がやや高い。

「矛盾」ということばは文中で話しことばの叙述の中に使われており、「ただし、耳で聞き、口でしゃべることばの 性は、段階としては最初のものであり、そのいきいきとした働きかけは、文字におきかえてしまうことのできないものをもっている。」というこの部分だけを読めば全然当てはまらないとは必ずしも言えないようである。そうした点にこの誤答が生まれた原因があろう。「間接」

ということばは、すぐ前の④段の中に使用されているので、それに惹かれたのであろうか。内容的には全然当てはまらない応答である。ウやオへの応答は問題本文を十分に読んでいない結果のあらわれである。とにかくこの問題は、単に選択肢の5箇の単語の意味を理解しているだけでは解決できず、文章全体を読みとっておらなければできない問題である。読解力を見るに適わしい出題と言えよう。このIの2四の応答者の平素の国語成績を5段階別に見ると次のごとくである。

表6

Iの2 成績	ア	イ	ウ	エ	オ	無答	計
5			1	13			14
4				26	2		28
3	7	7	9	49	8	1	81
2	5	1	1	16	7		30
1		4	7	5	1		17
X				1			1
計	12	12	18	110	18	1	171

正答肢エを選択したものについて、5段階別選択者の5段階それぞれの人数に対する百分比をみると、次の通りである。

(成績)	5	4	3	2	1	X
(%)	92.9	92.9	60.5	53.3	29.4	100

数値は実数、成績欄のXは中途編入のため成績未詳のもの

上位群が正答率極めて高い。文章全体を読みとる内容的理解を中心とした語いの問題であるためであろう。

なお、語句の問題としては、次のようなものが出ている。いちいちの説明は省くが、応答調査の結果を記しておく。

(8) 中三 2 II (古典に関するもの)

1 8

に入れることばとして、次のどれがよいか。

ア 泰盛 イ ならぶ者 ウ 馬乗り エ 従者 オ 作者

(応答率)	ア	イ	ウ	エ	オ	無答
全国	72.9					
本県	73.2					
応答調査	75.5	1.7	13.4	7.0	1.2	1.2

2 9

Aの文章の傍線部にあたる に入れることばとして、次のどれがよいか。

ア 乗らない イ 乗りたくなかった ウ 乗らなかった

エ 乗らないでいる オ 乗れなかった

〔応答率〕	ア	イ	ウ	エ	オ	無答
全国			74.4			
本県			74.9			
応答調査	8.1	3.5	69.7	13.4	4.1	1.2

(9) 中三 4

1 14

文章中の に入れることばとして、次のどれがよいか。

ア 描いている イ 染めている ウ 咲いている
エ 澄んでいる オ 燃えている

〔応答率〕	ア	イ	ウ	エ	オ	無答
全国					15.9	
本県					13.0	
応答調査	5.2	40.8	33.7	5.2	13.4	1.7

2 15

文章中の に入れることばとして、次のどれがよいか。

ア 浮かんで イ 追われて ウ 沈んで エ 導かれて オ 誘われて

〔応答率〕	ア	イ	ウ	エ	オ	無答
全国		70.6				
本県		70.6				
応答調査	4.1	72.6	4.1	6.4	11.6	1.2

以上の中、(9) 中三 4 1 14の問題は正答率が甚だ低いのが注目をひく。この問題の本文のその部分を引用すると、

山の高い所には今を盛りの紅葉がはなやかな色。

となっている。これに対し、応答調査によれば、

紅葉がはなやかな色に染めている。(40.8%)

紅葉がはなやかな色に咲いている。(33.7%)

紅葉がはなやかな色に燃えている。(13.4%)

という順で、応答している。「紅葉」と「染める」の取合わせは、古来日本語として使われてきたとこ

るで、古典的慣用であるといえる。そうした所からこれに反応の多かったことは尤もに思われる。ただここでは、「山の高い所には……紅葉が……」とあるのだから、やはり自他の区別を意識において自動詞をもってするのが穏当であろう。「染まっている」と「染めている」の区別をはっきり意識しない、そのあいまいさにこの誤答の生まれた原因がある。そこでイが誤答であることに気付き、自動詞を選ぶとすれば、選択肢の中では、ウ咲いている、エ澄んでいる、オ燃えている、の何れかになるわけであるが、「紅葉が燃えている」という言い方は、耳慣れないのであろうか、あまりにも誇張的に感じたのであろうか、「紅葉が咲いている」という、おかしな言い方のほうに回答が強く傾いている。この問題は、一面古典的な慣用的な言葉づかいよりも、自他の区別をはっきりさせる、語法上の正しさを求める出題であったと思われる。(文部省の発表のねらいでは、「文脈の中における語句の意味や用法の理解」となっている。)ただ、こうした自他の区別というようなことは、単なる語法上、文法上の問題として取り上げられるにとどまらず、平素から言語感覚が訓練され、磨かれているならば、おのずから気つくものであって、表現の美しさや、語感の真実さが、文章読解の指導において常に留意されねばならないゆえんである。また、「紅葉が咲いている」と「紅葉が燃えている」とを比べた時、後者をよしとするのも、語感による判断といってよかろう。紅葉燃ゆという言い方には、古典的典拠があるかと思うが、たとえそうしたことを知らなくとも、今を盛りの紅葉を「燃える」と形容するのは、納得しうることであり、特別の詩的表現とも言えないであろう。この程度の比喩的表現は、多少の文学的語感を持ち合わせれば理解し得るところである。この問題の甚だ低い正答率には、平素の語感の訓練の不足が原因しているように思われる。

2 文・段落の理解

ここでは、文章における文と文の関係、段落と段落の関係をどの程度読み取っているか、いわば文章の構造的理解、文脈的理解を中心にみてゆくことにする。

(1) 小五 三 ③

この文章の中の⑥の部分、全体としてどんなことをのべているのですか。

- 1 小鳥は、なぜ昼間はえさを食べなければならないかということ
- 2 飼っている小鳥は、なぜ食べどおしにえさを食べるかということ
- 3 長い旅行をすると、胃は^いたちまちからになってしまうということ
- 4 気をつけてみれば、鳥のえさを食べるようすがわかるということ

〔 応 答 率 〕

	全国	本県	応答調査	Iの2三
1	29.3	28.3	21.9	28.7
2			34.7	29.2
3			36.5	34.5
4			6.9	6.4
無答				1.2

この問題は正答率がたいへん低い。問題のねらいは、「段落の要点を読み取る力」となっているが、これは問題自身に少し難点があるのではなかろうか。

この⑥の部分は、次の5つの文から成り立っている。

- 1 わたしたちが少し気をつけて見ればわかることであるが、飼^かっているカナリヤとか、シジユウカラとかいうような、からだの小さい鳥は、かごの中で、たえずえ^えさを食べている。
- 2 ほとんど食^くべどおしのように、食べている。
- 3 小鳥たちは、たえず食べていなくては、かれらの命をつなぐことができないのである。
- 4 もし、こんな小鳥たちが長い旅行をするのに、昼間飛^とびつづけていては、かれらの胃はたちまちからになって、もう旅行をつづける元気がなくなってしまうにちがいない。
- 5 そして、夜になってしまえば、かれらはえ^えさをさがすことはできない。

こういった文で、これを一口にまとめることはなかなかむずかしい。あえて言うならば、小鳥はひるまはえさを探して食べなければならぬので、ひるま渡りをするわけにはゆかないのだ、というようなことが述べられているように受け取られる。したがって、「全体としてどんなことをのべているのですか」という問いに対して、ここにかかげられた4つの選択肢は、必ずしも満足すべき答えとはなっていないように思われる。正答肢とされている「1 小鳥は、なぜ昼間はえさを食べなければならないかということ」という表現も、やや疑問が残る。「なぜ」に対する答えはこの本文にはなにも書かれていないようだ。むしろここは、小鳥は昼間はいっしょうけんめいえさを食べる、食べざるを得ないという事実について書いているというべきだろう。理由を問う内容でなく、事実を述べる内容に1の選択肢を修正して出したならば、いくらか正答率は高まるのではあるまいか。それで、正答肢を次のように修正してみた。(また4の選択肢は応答率が極めて低かったので、これも序でに変えた。)

Iの三四

この文章の中の⑥の部分は、全体としてどんなことをのべているのですか。つぎの中からいちばんよいもの一つだけえらんで、その番号を○でかこみなさい。

- 1 長い旅をする小鳥たちは、昼間えさを食べなければならないということ。
- 2 飼っている小鳥は、なぜ食^くべどおしにえさを食べるかということ。
- 3 長い旅行をすると、胃はたちまちからになってしまうということ。
- 4 夜になれば、小鳥たちは、えさをさがすことができないということ。

この各選択肢に対する応答は、次のごとくであった。

1	2	3	4	無答
34.0	26.9	22.2	14.0	2.9

選択肢1への応答がいくらか高まったが、まだ他の選択肢への応答も多い。いま、Iの2三とIの3四の応答について、それぞれの平素の国語成績を5段階別に見ると、次の表のごとくである。

Iの二三

表7

成績	1	2	3	4	無答	計
5	6	7	1			14
4	14	9	14			37
3	24	22	30	4	1	81
2	3	9	12	4	1	29
1	1	3	2	3		9
X	1					1
計	49	50	59	11	2	171

Iの三四

表8

成績	1	2	3	4	無答	計
5	6	5	1	2		14
4	16	10	6	4	1	37
3	26	21	20	11	3	81
2	5	8	10	6		29
1	5	2	1		1	9
X				1		1
計	58	46	38	24	5	171

(数値は実数
Xは途中編入のため成績未詳のもの)

この表にも現れているように、各選択肢への応答の分散は、成績の上下によるものでなく、成績の上下を通じて分散している。成績のよしあしに拘らず、あるいは1を選び、あるいは2を選び、あるいは3を選ぶという具合である。こうした現象は心情の読み取りの反応にはよく見られることであるが、この場合のような内容的把握においてはありえないことである。このことは、前にも述べたように、この選択肢に確たる正答肢というべきものがないためと考えられる。

一体この⑥の部分の文章は、この文章全体の構成から、文脈的というならば、⑤の部分を受けて⑦の部分へ進む中間的過渡的叙述である。この⑥の段落自身が一つのまとまった思想を述べているのではない。このような段落の取り扱いとして、この段落の要点を読み取るというような出題の仕方自身に問題があると思われる。その前の⑤の部分の最後の文、「つぎに、もっとたいせつなことは、かれらは昼間はえさを求めなければならないということである。」を受けて、その事実を具体的にやや詳しく述べているのが、この⑥の部分である。文章全体の中でこの段落がどのように位置づき、どのようなはたらきをしているかが問題である。もちろんこの問題の出題者の意図もそこにあったことは、文部省の中間報告で、この問題について、「部分的な文章を要約する能力はその部分の文章の内容だけでなく、文章全体とつねに関連させて考えることが必要である。」と解説しているところからも、推察されるのである。

そこで、こうした段落のはたらきを理解しているかどうか、次のように問うてみた。

Iの四三

この文章の⑥の部分はということについて述べているのですか。⑤の部分とのつづきで考え、⑤の部分の中のどのところをくわしく説明したものか、そのところを書き出さない。

この応答として、前述の「かれらは昼間はえさを求めなければならない」という部分を指摘できたものは、171人中43人(25.1%)であった。いまこの43人について平素の国語成績をみると、次のごとくである。

成績	5	4	3	2	1	X	(Xは途中編入のため成績未詳のもの)
人数	10	15	14	3	0	1	
各段階別人数に 対する%	71.4	40.5	17.3	10.3	0	100	

上位群に属するものほど、応答率が高くなっている。つまりこの⑥の部分の全文における位置付けを理解させるこの問題は、その正答者は平素の国語成績に比例しており、こうした出題は、その読解力を評価するに適わしいものとなっているようだ。

この点さきの問題 I の 2 三、I の 3 四の場合と比較してみたい。それぞれ正答肢と見なされる 1 を選択したものについて、その 5 段階別の百分比をみると次のごとくである。(表 7、表 8 を参照)

	5	4	3	2	1	X
I の 2 三 1 (49 人)	12.2	28.6	49.0	6.1	2.0	2.0
I の 3 四 1 (58 人)	10.3	27.6	44.8	8.6	8.6	
I の 4 三 (43 人)	23.3	34.9	32.6	7.0	0	2.3

I の 4 三の正答者が、上位群において、多くを占めており、I の 2 三や I の 3 四の正答者が上位群において多くないことが知られる。

また、この I の 4 三の問題で正答したもの(43 人)が、I の 2 三や I の 3 四でどのような選択肢を取ったかを見ると、次のごとくである。

	1	2	3	4	無答
I の 2 三	16	18	8	1	
I の 3 四	16	14	5	7	1

以上のような選択の分散を見れば、この調査問題が(あるいはさらに I の 3 四の問題が)文章全体の中に段落を位置づける能力とは一致しない出題であったことがわかるであろう。もっとも、このことから逆に、個々の段落の意味把握に、文章全体と関連させる力が働いていない、そうした欠陥のあらわれとも解釈できるかも知れない。この調査問題の出題意図からすれば、そのように解釈すべきかとも思う。しかし、私は前述したように、この応答の分散は、むしろ問題自身にいきさか疑問があると考えるのである。それにしても、I の 4 三の問題において 25% の正答率しか得られないことは、段落相互の関係や、文章全体の中でその段落のもつ意味あいを理解させるといふ、段落の取扱いとしては最も大切な指導が、平素のうちに身に付けている結果ではないかと思われるのである。

(2) 小五 一七 ⑦

小鳥たちは、なぜ、そのように夜わたっていくのであろうか。という文に対する説明をしているのは、つぎのどれですか。	
1 ④と⑥と⑦の部分	2 ④と⑦と⑧の部分
3 ⑤と⑥と⑦の部分	4 ⑥と⑦と⑧の部分

	全国	本県	応答調査	I の 2 七	I の 4 四
1			23.7	12.9	12.3
2			27.7	25.7	25.1
3	41.7	39.2	33.0	43.9	45.1
4			13.9	11.1	15.2
無答			1.7	6.4	2.3

この問題も正答率が低い。殊に調査校の正答率は低かった。この問題の出題のねらいは「段落と段落との関係を読み取る力」となっている。具体的には④～⑧の文章の展開を把握すればできる問題である。そこで、④～⑧の文章をわかり易く分析して、文章の展開をあとづける問題を出してみた。

この文章の中の⑤から⑧までの部分は、④の部分の説明になっています。

④の部分は、ア(小鳥たちは……………いくのであろうか。) イ(鳥の目は……………旅をしているのであろうか。) 二つの文からなりたっています。

⑤⑥⑦⑧の部分は、それぞれ ア、イのどちらの説明になっているでしょうか。()の中に、ア、イ、どちらか、あてはまる方を書きいれなさい。

⑤の部分() ⑥の部分() ⑦の部分() ⑧の部分()

この問題に対する応答は次の通りであった。

	⑤の部分	⑥の部分	⑦の部分	⑧の部分
ア	52.6	57.3	44.5	18.7
イ	35.7	29.8	40.9	67.3
無答	11.7	12.9	14.6	14.0

正答は、⑤(ア)、⑥(ア)、⑦(ア)、⑧(イ)であるが、アとイと等分に二つずつ入れたものが多く、4つを通して、ア、ア、ア、イ、と正答したものは、わずかに12人に過ぎなかった。子どもたちは、このIの35の問題のような、文章を分析する問題は、全く不慣れであるようだ。実はこうした文章を分析して考える問題をしたならば、それが示唆となって、調査問題の正答率も上がるのではないかと考えて出したのであって、この問題のあとで調査問題をもう一度、再度行なってみた。(Iの44) その応答については、最初にかかけておいた。応答率においてはIの27と殆んど変わっていない。尤も、表9でわかるように、ともに同じ選択肢を取ったものは、8と2がかなりの数を示すが、全体で82人で、他の89人(全体の52%)のものは、その選択を移動している。いかにも不安定な選択である。いまこの点を、Iの35で、ア、ア、ア、イと正答した12人のものについて、見てみたい。このIの35の正答者は、当然Iの44では、正答肢3を選択するのが、論理的すじ道であるはずだが、事実は必ずしもそうでないのである。いま、この12人が、Iの27とIの44でどのような応答をしているか、みると次の通りである。

Iの27とIの44の関係 表9

四 七	1	2	3	4	無答	計
1	4	5	9	4		22
2	6	21	10	7		44
3	7	9	50	8	1	75
4	1	6	6	5	1	19
無答	3	2	2	2	2	11
計	21	43	77	26	4	171

(数値は実数)

Iの27 Iの44

8 → 3 8人(5-3人, 4-3人, 3-2人)

8 → 1 1人(4)

8 → 2 1人(2)

8 → 4 1人(3)

4 → 3 1人(2) ()内数字は、国語成績5段階別。

12人中8人はともに正答しており、3人は正答からかえって誤答に移り、1人は誤答から正答になっている。Iの3五において正答しておれば、当然Iの4四は正答肢3を選ぶはずと思われるのにそうならない。少くもIの3五で⑧の部分に「(鳥の目は……旅をしているのであろうか。)」を入れている以上、Iの4四では、⑧を含む2や4の選択肢は避けらるべきであるのに、上にも見る通り、平気で2や4を選択しているのである。このようなことは、子どもの答案ではよく見られることで、子どもはその場その場で答えるので、一貫したすじをそれらの間に求めるのは、むしろ子どもの心理に即さない、大人の考え方であるのかもしれない。ではこのような誤答は何故生ずるのか。おそらく、子どもたちは、この調査問題の場合、「小鳥たちは、なぜ、そのように夜わたっていくのであろうか。」という文を、その本文に立ち返って静かに吟味するというをしない。文章の表現をていねいに読まず、内容的に直観的に把握して読んでゆく。そうした子どもの文章の読み方が、こうした結果をもたらしているのではないかと思われる。選択肢2(④と⑦と⑧の部分)に回答しているものが、正答肢3に次いでその選択肢が多いのであるが、ここでは、鳥の目は夜でもあるていど見えるのだということを含めて、「小鳥たちはなぜそのように夜わたっていくのであろうか。」の説明と見做しているわけである。(④の部分をしていねいに読めば、それが設問の傍線部外のことであることがわかるはずである。)こうした大ざっぱな読み、内容だけを把握して文章表現に即してていねいに読まない習慣、こうした傾向がこのような結果をもたらしているものと思われる。

私は、文章の読みは、表現をていねいに読むことが大切だと思う。Iの3五の問題で示したような、文章の分析をすることは、極端になると、分析のための分析になって、正しい文章の読解とは別なものとなり、その点注意を要するが、文章を正しくていねいに読むためには、こうした文章の分析的読解も、読解の上に十分生かされてゆくことがなされてよいと思う。

なお、小五の問題では、一四④の問題が、そのねらいとして「文章の中での段落のはたらきを理解する力」となっており、正答率もかなり低く、興味ある問題を含んでいるのだが、内容的に見ると、むしろ、その段落の意味内容の把握のしかたが中心問題になり、いわば、段落の要旨の把握の問題なので、この項での説明を省略する。

(3) 中一 1 3 ③

②の部分は、①の部分に対して、どのような関係にあるか。

ア ①とならべて、もうひとつの面から、例をあげて説明している。

イ ①とは反対のことを、例をあげて説明している。

ウ ①の理由を、例をあげて説明している。

エ ①を、さらにくわしく、くり返して説明している。

〔応答率〕					
—	全国	本県	応答調査	Iの2四	Iの3三
ア	44.0	42.9	42.5	61.1	68.7
イ			7.7	4.9	4.4
ウ			19.7	11.5	10.4
エ			30.1	22.5	16.5

この問題は、段落と段落の関係を正面から取り上げ、その関係をことばで説明した選択肢で問うたものである。6月実施の際の正答率はかなり低い。誤答肢の中では、エの選択肢への反応がかなり強い。これは、選択肢の内容からいって、そうした言い廻しで説明することも、正答とはいえないが、許されていいかもしれない。この選択肢にかなりの応答が見られるのも肯けることである。

そこで、分析的問題では、まず第一に原調査問題をそのまま行ない、(Iの2四)、さらにこの①②の部分の文章構造を分析的に詳しく理解させる次の問題を課した。

Iの3一

①の部分と②の部分で、作者はいろいろ具体的に説明しているが、この①②の部分に共通して作者がそこに言おうとしていることは、どういうことなのか。そのことが述べてある文句を本文中に見出して、それを左に書き出さない。

Iの3二

一の問題に引き続いて、特に①の部分と②の部分とは、それぞれ何について述べているのか。左に書きなさい。

①の部分——

②の部分——

そしてこのIの3一、二の問題のあとで、再度調査問題を行なった。(Iの3三)。この文章構造の分析的考察を通して、Iの2四とIの3三の間に、正答率の向上の見られることを期待したのである。

ところが、これらの問題の応答率は最初に記した通りで、Iの2四の問題で既に6月実施の際より20%近くも高い正答率を示しており、Iの3一二の分析的問題を経過しても、Iの2四とIの3三の間に大きな差の生じない結果になった。

一体Iの2四で、6月実施の際より20%近くも正答率が上昇したのはなぜであろうか。9月実施の調査問題が6月実施の際よりその正答率の高くなることは、前にも見てきたように屢々起こる現象であるが、その上昇率は、大体10%どまりで、このように高い上昇率を示しているのは、他に見られないところである。これはおそらく次のような原因によるのでないかと思われる。すなわち、Iの2四と同一紙で、次のような問題が出されている。

Iの2一

この文章で、作者は、どういうことを言おうとしているのか、簡単に述べなさい。

子どもたちは、Iの2四の問題をやる直前に、この問題に接しており、この問題で、この文章全体の要旨を模索したことが、このIの2四の問題を解くに当たって、その考えを大きく助けたものと推測されるのである。文章全体の理解の中で段落相互の関係を読み取ることができたのであろうと考えられるのである。それ以外にこの20%上昇の理由を見出すことはできないように思う。して見ると、このよう

な段落相互の関係の理解は、文章全体の主旨を掴むことと極めて密接な関係にあり、文章全体の主旨を掴むということは、段落相互の関係を理解するということと、ある意味では表裏一体の問題ではないかと思われるのである。段落を文章全体の構造の中に位置づけて理解するということが、文章全体を把握することにほかならない。段落指導においてはこうした点に留意することが極めて大切なことであろうと思う。

(4) 中三 ① ②

段落③のVのところに、補うことのできることばとして、次のどれがよいか。

ア また
 イ しかし
 ウ たとえ
 エ すなわち
 オ それとも

〔応答率〕					
	全国	本県	応答調査	Iの2二	Iの3三
ア	30.9	26.1	30.2	32.1	36.9
イ			23.8	19.3	16.4
ウ			16.3	20.5	17.5
エ			12.2	13.5	14.0
オ			16.3	14.0	14.6
無答			1.2	0.6	0.6

この問題も正答率がひくい。問題のねらいは、「ことばのきまりの理解(接続する語句)」となっているが、具体的には、文章を構造的に理解し、文と文との関係を読み取ることを要請する問題である。

そこで、この段落③の文章を分析し、その文と文との関係を構造的に理解できるかどうか、次のような問題を出した。

Iの3二

段落③は次の四つの文からなりたっている。

A 「そのような……………考えられる。」
 B 「録をとり、……………沈黙させることもできる。」
 C 「もし、私たちが、……………余裕もできるわけである。」
 D 「だから……………いなければならぬだろう。」

Cの文は、その前文A、Bの文に対してどのような関係にあるか。次の中から最も適当なものを一つ選んで、その記号を○で囲みなさい。

ア Bの文とならべて、もうひとつの面から、Aの文を具体的に説明している。
 イ Bの文とは反対の面から、Aの文を具体的に説明している。
 ウ A、Bの文で述べたことと理由や条件をくわしく述べている。
 エ A、Bの文で述べたことをさらに具体的にくわしく説明している。
 オ A、Bの文で述べたこととは全く別な問題を新たに述べている。

この問題に対する応答率は次のごとくであった。

ア	イ	ウ	エ	オ	無答
26.3	15.8	15.2	35.1	7.0	0.6

アが正答肢であるが、エの方が応答率が高い。いま各選択肢の応答について、その選択者の平素の国語成績を5段階別に見てみると表10のごとくである。これで見ると、さすがに上位群はアが多いが、エもほぼこれに比肩して多く、さらにイにも数人あり、分散度がかなり強いと言ってよい。

ところで、この問題のあとで再度調査問題を行なった。(Iの3三)。その選択状況を、このIの3二の選択と対応させてみると、表11に見るごとく、Iの3二でエを選択したものが、Iの3三では多数アを選択しているのである。(これと同じようなことが中一 1 3の場合にも見られた。)この二と三は、同一問題紙(Iの3)の隣り合わせの問題で、Iの3二のアの説明はIの3三のア(「また」)の説明として、それ以外には考えられないはずであるのに、その他の、例えばエのような説明でIの3三でアを選択するのは、子どもたちにとって、段落と段落の関係を、このようなことばで説明することが、いいかえれば、それをはっきり意識することが、はなはだ困難な、むずかしいことであることをあらわしている。Iの3三の正答率は最初にかかげたように36.9%であるが、Iの3二との関係で見ると、真の意味での正答者は171人中27人、わずかに15.8%ということになる。

実はこの分析的問題の作成時においては、Iの3二の問題をすることによって、この段落③の文章の構造を理解し、(少なくともそうした指導的示唆を与えたことになるので)、その結果、調査問題を再度行なった時に、正答率にいくばくかの上昇を示すであろうと考えていた。ところで実際に行なってみると、このIの3三の応答は、最初に示したように、Iの2二に比べて4.8%の上昇を見たに過ぎなかった。ただ、平素の国語成績5段階別にその応答を見ると、表12、表13に見るごとく、アの選択肢は上位群において有力であり、かつIの2二の場合よりもIの3三の場合の方が、正答肢アへの上位群の集中度が高くなっているのが認められる。Iの3二の問題のような、文章構造の分析的考察は、その問題自身においては正しく答えられなかったにせよ、そうした考察を経過することが、上位群には効果的な影響をいくらかでも与えたものと考えてよいのではなからうか。

表 10

Iの3 成績	ア	イ	ウ	エ	オ	無答	計
5	9	2		3			14
4	13	2	1	12			28
3	19	16	12	26	8		81
2	3	4	8	11	4		30
1	1	3	5	7		1	17
X				1			1
計	45	27	26	60	12	1	171

Iの3二と三の関係 表 11

二 三	ア	イ	ウ	エ	オ	無答	計
ア	27	7	5	1	5		45
イ	8	5	6	3	5		27
ウ	5	7	6	4	3	1	26
エ	20	8	9	15	8		60
オ	3	1	3	1	4		12
無答			1				1
計	63	28	30	24	25	1	171

表 12

Iの2 成績	ア	イ	ウ	エ	オ	無答	計
5	12	1		1			14
4	15	5	1	4	3		28
3	19	20	17	15	9	1	81
2	6	5	10	2	7		30
1	2	2	7	1	5		17
X	1						1
計	55	33	35	23	24	1	171

表 13

Iの3 成績	ア	イ	ウ	エ	オ	無答	計
5	13			1			14
4	22	1		2	3		28
3	23	17	12	18	11		81
2	4	4	10	2	10		30
1		6	8	1	1	1	17
X	1						1
計	63	28	30	24	25	1	171

Ⅲ (付) 読解力の伸び

小学校第5学年、中学校第1学年、第3学年、この3箇学年で読解力がどのように伸びてゆくか、それをみる一資料として、この度の調査で中学校第1学年の [3] の問題を、そのまま小学校第5学年、中学校第3学年にもやらせてみた。この [3] の問題は、元来、書くこと、作文の問題として取扱われているものであるが、その問題を解答するに当たっては読解の力を必要とし、作文教材を素材とした読解の問題と見做しても、さしたる不都合はないように思われる。ここでは読解の立場から、これらの問題を見てゆきたいと思う。

以下紙幅の都合上説明は省略し、応答結果を記すにとどめる。その解釈は読者諸君の研究にお任せしたい。まず最初に設問と、中学1年の応答率を示す。その本文については13ページ参照。

中一 [3]

1 ⑪

⑪の部分の [A] のところにあてはまる書き出しの文章としては、次のうちで、どれが最もよいでしょうか。

ア だれにでも短所はある。しかし、短所をなくすことはなかなかむずかしい。

イ 人間は他人の長所はほめたがらないが、短所は悪いくせがある。これはよいことではない。

ウ 人には、長所と短所がある。人として、長所をのぼし、短所をなくすことがだいじなことである。

エ わたしは、「すなお」という長所をもっている。これは、わたしのたいせつなことからものである。

〔応答率〕			
	全国	本県	応答調査 II ₁
ア			19.1 8.8
イ			18.6 15.9
ウ	59.0	57.3	54.1 63.8
エ			7.7 8.2
無答			0.5 3.3

2 ⑫

⑫の部分の [B] のところにあてはまることばとしては、次のうちで、どれが最もよいでしょうか。

ア 必ず

イ いちいち

ウ どんな場合も

エ 必ずしも

〔応答率〕			
	全国	本県	応答調査 II ₂
ア			8.7 5.5
イ			12.0 12.6
ウ			16.4 8.2
エ	68.6	72.0	62.9 70.4
無答			3.3

3 ⑬

③の部分の のところにあてはまることばとしては、次のうちで、どれが最もよいでしょうか。

ア そういえば
 イ そんなときは
 ウ それにしても
 エ それにくわえて

〔応答率〕

	全国	本県	応答調査	Ⅱ ₃
ア	72.0	70.3	66.1	76.3
イ			9.3	6.7
ウ			14.8	9.9
エ			9.8	3.8
無答				3.3

4 ⑭

次の 中の文を、④の部分の√の(1), (2), (3), (4)中のどこかに入れるとすれば、どこがよいでしょうか。

ア (1)
 イ (2)
 ウ (3)
 エ (4)

〔応答率〕

	全国	本県	応答調査	Ⅱ ₃
ア			13.7	6.0
イ	45.9	45.7	45.4	48.9
ウ			18.0	18.1
エ			20.2	18.7
無答			2.7	8.2

5 ⑮

次の 中の文を、この作文に書き加えるとすれば、どこが最もよいでしょうか。

ア ①と②の間
 イ ②と③の間
 ウ ③と④の間
 エ ④と⑤の間

〔応答率〕

	全国	本県	応答調査	Ⅱ ₅
ア	54.5	52.5	50.3	60.5
イ			15.3	12.6
ウ			14.8	12.6
エ			18.0	12.1
無答			1.6	2.2

次に、この中一 と同じ問題を、9月に、小学校5年、中学1年、中学3年で、分析的問題Ⅱとして行なった。その結果を一覧表として下にかかげる。ただし、中学1年については、6月の応答調査もともに記しておく。

〔応答一覧表〕

	1					2					3					4					5				
	ア	イ	ウ	エ	無答	ア	イ	ウ	エ	無答	ア	イ	ウ	エ	無答	ア	イ	ウ	エ	無答	ア	イ	ウ	エ	無答
小五 Ⅲ	20.5	17.0	52.0	7.6	2.9	19.9	24.6	14.6	32.7	8.2	54.4	9.4	21.6	8.2	6.4	15.8	35.6	19.3	19.9	9.4	26.3	25.1	21.0	27.0	0.6
中一 応答調査	19.1	18.6	54.1	7.7	0.5	8.7	12.0	16.4	62.9		66.1	9.3	14.8	9.8		13.7	45.4	18.0	20.2	2.7	50.3	15.3	14.8	18.0	1.6
中一 Ⅱ	8.8	15.9	63.8	8.2	3.3	5.5	12.6	8.2	70.4	3.3	76.3	6.7	9.9	3.8	3.3	6.0	48.9	18.1	18.7	8.2	60.5	12.6	12.6	12.1	2.2
中三 Ⅲ	5.3	13.5	77.1	3.5	0.6	5.3	2.9	3.5	86.0	2.3	78.3	4.7	11.1	4.7	1.2	4.1	59.6	12.9	18.7	4.7	64.8	11.7	8.2	13.5	1.8

この表を見ていると、いろいろな問題が浮かび上がってくるが、いま、それらを整理する余裕をもたないので、ここにはそれらについての考察を省略する。ただ興味ある一資料としてここにかけ、読者諸君の研究に供したいと思う。

「全国学力調査の結果に関する分析的研究」は、大竹大三、若林兵三、沢田勉、片桐安治の4名をメンバーとする小委員会によって推進された。このメンバーのうち、全体の企画を片桐安治が担当し、大竹大三が国語についての研究を担当した。

〔大竹大三〕